



日本王代一覽

伊5
1,088
2



門伊5
1088
卷 2

日本王代一覽卷之二目錄

一葉
九册
天智天皇

在位十年

現治廿五年十一月廿七日
森鴻次郎氏寄贈

六葉
天武天皇

在位十五年

白鳳十四
朱鳥一。

七葉
持統天皇

在位十一年

大寶三。
慶雲四。

九葉
文武天皇

在位十一年

和銅七。

十二葉
元明天皇

在位八年

靈龜二。
養老七。

十二葉
元正天皇

在位九年

神龜五。

十三葉
聖武天皇

在位廿五年

天平九。

十八葉
孝謙天皇

在位十年

天平勝寶八。
天平寶字二。

十六葉
廢帝

在位六年

自天平寶字二。
至八。

稱徳天皇

在位六年

天平神護二。神護慶雲四。

光仁天皇

在位十二年

寶龜十一。天應一。

桓武天皇

在位廿五年 延暦廿五。

平城天皇

在位四年

大同四。

嵯峨天皇

在位十四年 弘仁十四。

淳和天皇

在位十年

天長十。

仁明天皇

在位十七年

承和十四。嘉祥三。

文徳天皇

在位八年

仁壽三。齊衡三。天安二。

日本王代一覽卷之二

三十九代

天智天皇

舒明天皇ノ子ナリ。御母ハ齋明天皇ナリ。

始ハ中大兄皇子ト号ス。又葛城皇子トモ開別皇子

トモ申ス。中臣鎌足ト策ラメクラス。皇極ノ段ニ詳ナ

リ。孝徳齋明二代ノ間。皇太子トナル。齋明ノ七年ニ大

唐并ニ新羅ヨリ百濟ヲ破リケレ。百濟國ノ臣福信ガ

請ニヨリテ。軍勢ヲモヨホシ。齋明天皇。土佐國朝倉

行幸。此時天智太子タルニヨリテ。軍中ノ政ヲ攝シタメ

フ。山中ニ黒木ノ御所ヲ作り。儉約ヲ用ヒ。民ヲ勞セシ

メス。朝倉木丸殿トハ是ナリ。又刈萱ト云フ所ニ關ラス

エ。非常ヲ戒メ。出入ノ者ヲ改テ其姓名ヲ尋問テ。往來



セシム。此取ヨリ。既ニ百濟ノ加勢ヲ出サントスルトキ。其
年ノ七月ニ齋明崩御アリシカ。天智素服ヲ著ナガラ。
政ヲ聞タマフ。其年ノ八月ニ將軍阿曇比羅夫河邊
百枝等ヲ大將トシテ。百濟ヲ救ハシメ。兵糧武具ヲ贈リ
遣ス。九月百濟ノ皇子豐璋ニ秦朴市田來津等五
千ノ兵ヲ添テ。百濟ヘ送り歸ス。福信出迎テ。豐璋ヲ百
濟王ト仰キ。日本ノ下知ヲウク。豐璋ハ久ク人質トナリ
テ。日本ニ居ルトイヘトモ。彼國大唐新羅ニ破ラレテ。
國王ナキニヨリテ。如此其後天智ハ齋明ノ喪ヲ奉ジ
テ。大和ヘ歸リタマフ。明年布三百端ヲ百濟王豐璋
ニ賜リ。矢十萬本。絲五百斤。綿千斤。布千端。韋千張。
稻種三千石ヲ。福信ニ賜フ。今年大唐并新羅ヨリ。高

麗ヲ攻ム。高麗加勢ヲ日本ニ請フ。即加勢ヲ遣サル。
大唐ノ大將任雅相病死シ。龐孝泰ハ討死ス。蘇定方
ト云ル大將。高麗ノ都ヲ攻圍ケルガヨレモ利アラス
シテ引退ク。其明年又兵船兵糧ヲ調ヘ。數萬ノ軍
兵ヲ百濟ヘ遣サレ。新羅ヲ伐シム。此時豐璋ト福信
ト。中惡クナリテ。福信ヲ殺ス。既ニシテ新羅ノ兵進
テ百濟ヲ攻ム。大唐ノ大將孫仁師。劉仁願。劉仁軌。水
陸ヨリ百濟ヘ攻來ル。中ニモ劉仁軌カ率ル兵船百七十艘。
白江口ト云フ所ニ陳ヲ張ル。日本ノ兵コレト合戦ス。大
敵ナレハ左右ヨリ夾ミ討レテ敗軍シ。水ニ溺レテ死スル
者數ヲ知ラス。日本ノ大將朴市田來津。齒ヲタイシハ
リ大ニ怒テ。唐兵數千人ヲ切殺シテ。其身モ討レヌカ。

リケレハ豊璋八國ヲ捨テ高麗へ奔ル日本ノ軍兵ハ皆
歸陳ス。百濟ノ人々多ク日本へ逃來ル者多シ其中
男女四百餘人ヲ近江國神前郡ニ移シ置ル又東國
へ二千餘人ヲ分チ遣ス。其後大唐ヨリ劉德高トイ
ヘル使者來ル其歸ルトキニ守君大石坂部石積等ヲ
遣唐使トシテ發船ス。大唐ノ高宗皇帝ニ逢テ歸ル
カクテ異國ト無事ニナリレカバ筑紫ノ内所ニ城ヲ
構へ堤ヲ築キ。畚ヲスへ。又大和國高安城。讚岐國屋
嶋城ヲモ築カル。齋明天皇崩御ノ後六年ヲ歷テ新
ニ倭ヲ築テ改メ葬ル。此時ニテ天智イニタ即位ノ禮
ヲ行ハス。猶太子ノ作法ニテヲハシケル。此葬リ畢テ
後。都ヲ近江ノ滋賀ニ遷ル。明レハ七年春正月。滋賀ノ

都ニテ即位シタマフ

八年ノ冬内臣中臣鎌足病ニ卧ケレハ天皇自ラ其家
ニ行幸コリテ。何ニテモ思フコトアラハ申スヘレト宣フ。
鎌足對テ我何ヲカ申スベキヤ。唯葬禮ヲ輕クセシコト
ヲ願フ。生テ國ニ益ナク。死シテ何ソ人ヲ勞セシヤト申
ス。時ノ人感ゼスト云コトナシ。其後天皇又御弟天武ヲ
鎌足ノ家へ遣ハシ。内大臣ニ任セラレ。大織冠ト云官ヲ
賜テ。中臣ヲ改テ。初テ藤原姓ヲ賜ハル。是内大臣ノ始
ナリ。但シ此時左右ノ大臣ノ上ニ位ストナシ。大織冠ハ
正一位ニアタル官ナリ。藤原ハ鎌足ノ生レタル在所ノ
名ナリ。其出ル取ノ名ヲトリテ姓トセリ。其後幾程
ナクシテ大織冠薨ス。歲五十。或ハ五十六トモ云リ。天

皇自^{ミカド}ラ其家ニ行幸アリテ歎^{ウレシ}キタマフ。天皇生レツキカ
カシク。學問ヲ好^{ウレシ}ミシカハ萬^{マン}ノ政^{セイ}。其外禮法儀式^{レイポフギシキ}此
御代ニ至リテ能調^{ナゲ}フレリ。後世^{コノキ}ニテ。本朝中興^{ホンチウチュウキョウ}ノ帝ト
申ス。

十年^{カキノトシ}辛未^{シノヒゲ}ノ正月元日^{カキノトシ}。御子大友皇子ヲ太政大臣
トシテ。百官ヲ總^ステ萬機^{マンキ}ノ政ヲ行ハレム。蘇我赤兄^{ソゴアカノノ}ヲ
左大臣トシ。中臣金連^{ナカノミナツネ}ヲ右大臣トス。太政大臣ハ此時
ヨリ始ル。コレヨリサキ。天皇御弟天武ヲ太子トス。天
武ノ后持統^{チツ}ハ天智ノ娘ナリ。大友皇子ノ妃十市皇
女^{トシチ}ハ天武ノ娘ナリ。カタクシタシキナカレドモ。大友
生レツキサカシク。人ヲナツケ。其上學問ヲ好^{ウレシ}ミ。詩ヲ
作り。文章ニ達^{タツ}シケレハ。世ノ久智^{キチ}心ヲ大友ニ寄セケルニ

ヤ。天武疑^{ウタガ}ヒ畏^{オそ}ルハ心アリ。其年ノ十月。天智不例^{フレイ}ナリ
シカハ遺言^{ユイゴン}ノ爲ニ天武ヲ召ス。蘇我安麻呂^{ソゴアサヲ}ト云フ者。
サヘヤキテ言ケルハ心アリテ返事申サレヨ。天武ウナ
ヅヒテ御前へ參ル。天智我疾甚^{ウレシ}シ。後ノ事汝^ニ任ス
ト宣フ。天武某^{ツカ}シ多病^{タビョウ}ナリ。願クハ大友皇子ヲ太子ト
シタマヘ。某^{ツカ}シハ出家セント云。天智其心ニ任スベシト
云。天武即内裏^{ウチノミ}ノ佛殿^{ブツデン}ニテ。髮^{カミ}ヲ剃^カテ僧トナル。勅^{ツク}ア
リテ袈裟^{カサ}ヲ賜^{タマ}ル。天武御前へ參リ暇ヲ申シ。許容^{ヨウヨウ}ア
リシカハ。即千近江ヲ出テ。吉野へ赴^{ツク}ク。群臣皆宇治マ
テ送^{オウ}リテ歸ル時人申シケルハ。天武ヲ吉野へ遣ス。トハ
虎^{トラ}ニ翼^{ツバサ}ヲツケテ放^{オウ}ツガゴトシト云リ。カ、リレ後ハ大友
皇子イヨク威強^{イキヤウ}クナリテ。左大臣蘇我赤兄^{ソゴアカノノ}右大臣中

臣、金連等ノ群臣皆大友ノ前ニテ盟ヲナレテ。少モ違
變アルヘカラスト約束ス。カクテ十二月。天智崩御ニ
シマス。在位十年。御歳四十六。或ハ五十八トモ云リ。又一
説ニハ天智天皇。或時山科ヘ行幸アリテ。飯リタマハズ。
天ニ登リタマフニヤ。御履ハカリ留ルニヨリテ。其所ニ
陵ヲ立タリトイヘリ。明レハ壬申ノ年。大友皇子ノハカラ
ヒニテ。吉野ヘ人ヲ遣ヒ。天武ヲ召カヘシ。近江ニ置テ。其様
子ヲ見テ。コレヲ殺スベキカトノ沙汰アリレカ。八十市皇
女竊ニ是ヲ悲シニテ。文ヲカキテ。魚ノ腹ノ中ニ入テ。吉
野ヘ送り遣ス。天武コレヲ見テ。大ニ懼ル。村國ノ男依
ト云フ臣ヲ召シテ曰ク。近江ノ諸臣我ヲ害セシ事ヲ
謀ルト聞ク。汝等急ギ美濃國ニ往テ。兵ヲ發シ。不破

ノ道ヲ塞クベシ。我モ又ヤガテ遣發セント云フ。其後天武
大伴志摩ヲ使トシテ。大和ノ留守高坂王ヲカタラハ
レケレバ。同心セサルニヨリテ。急ギ事ノアラハレヌサキニ
トテ。吉野ヲ出タマフ。俄ノ事ニテ。御車モナケシ。大武
ハ馬ニ乘。御后持統ハ輿ニ乘ル。御子草壁皇子。忍壁
皇子以下。近臣二十餘人。女孺十餘人。徒歩ニテ供奉ス。
路次ニテ。獵師二十餘人來テ。御供ニ候ス。又伊勢ノ貢
米ヲソセテ。通ル馬五十疋ヲ得テ。其米ヲハ捨テ。歩ノ
人ヲ乗セシム。此路次。山城國ヲ過ルトモ。流矢來テ。天
武ノ北背ニアタル。其尿ヲ矢背ト云。山中ニ逃入テ。鞍
馬ヲ繫ク。取ヲ鞍馬山ト号ス。其後大野ト云フ。取ニ
到テ。日暮。山中暗シテ。道ヲ知ラス。家ヲコホキテ。松明

トシテ是ヨリ進ニテ伊賀國ニ到ル中山ニ入時ニ當
國ノ軍士等數百人來リ參ルツレヨリ伊勢國ニ越テ
國司三宅連ガ軍兵五百人ヲ得テ鈴鹿ノ関ヲ塞ク天
武ノ子高市皇子大津皇子ハ皆近江ニアリケルカ潛
カニ逃出テ伊賀伊勢ノ内ニテ天武ニ參會ス此時天
武跡大川ノ邊ヨリ遙ニ天照大神ヲ拜セラル去程ニ
村國ノ男依美濃國ノ兵三千人ヲ催シテ不破ノ関ヲ
塞クヨシ注進シケレハ天武高市皇子ヲ不破へ遣シテ
守ラシム又東海道東山道へモ使ヲ遣シ軍ヲ催シム
天武持統モ口トモニ伊勢國桑名郡ニ暫ク休息セ
ラル世俗ノ説ニハ天武吉野國櫛ニテモ志摩國ニテモ
美濃ノ洲股ニテモ大友ノ衆ヲ逐レテ難議ニ及フト云

ヒツタフト日本紀ニハ見ヘ侍ラズ其後天武桑名ニ持
統ヲ留置其身ハ不破へ赴ク尾張國司小字部鉦鉤
二万ノ兵ヲ率テ從フ天武高市皇子ヲ和斬上云フ
取ニ居ラシメテ諸軍ヲ下知セララル天武ハ野上ト云フ
所ニ御座スガハルトコロニ大和國ニテ大伴吹負上云フ
者軍ヲ起シ天武ノ方トナリテ取々ニテ攻戰ヒ利
ヲ得テ既ニ奈良ニテ進テ入リ近江へ押寄ントス大
友皇子方々へ軍兵ヲ遣シ防グトイヘトモ利ヲ失
テ引退ク既ニシテ天武ノ大將村國男依等數萬ノ
兵ヲ率テ近江へ向フ皆赤キ符ヲツケタリ大友ノ大
將境部藥上息長橫川ニ戰テ藥ヲ切ル又鳥籠山ニ
テ大友ノ大將秦友足ヲ斬リ安河ニテ土師千島ヲ

生捕ル。即チ進テ勢多ミテ來リレカバ大友自ラ群臣ヲ率ヒテ橋ノ西ニ陣ス。互ニ鐘鼓ヲウチテ矢亂レ放テ雨ノゴトシ。大友ノ大將智尊ト云者勝レタル勇士ニテ防平戰ヒケレハ敵進ムコトアタハス。既ニシテ智尊討死ス。大友ノ軍散走ル。男依橋ヲ越テ粟津ニ至ル。大友ノ大將大養連谷塩手等皆討死ス。大友皇子行ヘキ所ナク山前ニ隱レテ自ラ縊レテ死ス。時ニ二十五歳ナリ。其頸ヲ取テ天武ノ御座所ヘ送ル。高市皇子近江ヘ來リテ罪ノ輕重ヲタビレテ。右大臣中臣金連ヲ切り殺シ。左大臣蘇我赤兄等數輩ヲ流罪セラシ。壬申ノ乱トハ是ナリ。

四十代

天武天皇

天智ノ第十ナリ。大友皇子討テ後伊勢ノ

國ヨリ大和ニ到リ。内裏ヲ造リ。淨見原宮ト号シ。即壇場ヲ設ケ。即位セラシ。壬申ノ乱ニ勲功アル者ヲ褒美セラシ。高麗新羅皆使ヲ獻レテ即位ヲ賀ス。白鳳二年始テ大藏經ヲ寫サシム。三年對馬國ヨリ白銀ヲ奉ル。是日本ニテ白銀出ル始ナリ。此代ニ正月躰歌トテ。内裏ノ庭ニテ男女ヲドリウタフコト也。又同キ十五日群臣御新ヲ進スルコト。六月晦日ノ夜。又大嘗會ノ悠紀主基モ。五節ノ舞姫モ。皆始レリ。諸社ノ祭モ始ルコト多シ。又朝廷ノ法度品々多ク定メラル。群臣ノ位四十八階ヲ定メラル。裝束ノ色ヲモ其位ニヨリテ定メラル。又人ノ姓氏ノ品ヲモ分チ定メラル。

白鳳十三年。大地震アリ。山クツレ。川涌出テ。諸國ノ官舎御藏并ニ神社寺塔多ク壞レ。人民六畜多ク死ス。伊豫國ノ温泉ハツブレテ出ス。土佐國ノ田地。五十餘万頃没シテ海トナル。伊豆國ニハ。俄ニツノ島出來ル。其外在位ノ間怪異多シ。

朱鳥元年九月ニ崩ス。在位十五年。年号。白鳳十四年。朱鳥一年。

四十一代

持統天皇女帝 天智ノ娘天武ノ后ナリ。壬申ノ乱ニ天武

ニ從テ。伊勢國ニテ赴キ。桑名ニ居テ。乱平ニテ後。大

和ノ都ニ飯ル軍中ニモ。即位ノ後モ。天武ヲ輔テ政ニ

預ルコト多シ。天武崩シテ。後持統政ヲ闡。持統ノ産

ル子ヲ草壁皇子ト云。天武ノ時ヨリ太子タリ。別腹ノ

子ヲ大津皇ト云。其器量人ニ勝シ。文才アリテ能

詩賦ヲ作ル。天武愛シテ政ヲ聞シ。天武崩シテ後。大

津皇子竊ニ謀叛ノ志アリ。事アラハレケレハ。持統ト

草壁太子ノハカラヒニテ。大津ヲ殺ス。其時モ。臨終ノ詩

ヲ作レリ。時ニ二十四歳トナシ。カクテ二年ヲ歷テ。草

壁太子薨セラル。時ニ二十八歳。其明年持統遂ニ天

皇ノ位ニ即ク。群臣ニ種ノ神器ヲ奉ル。大赦ヲ天下

ニ行レ。其上京中畿内ノ年老タル男女五千餘人

ニ稱ヲ賜フ。人毎ニ二十束ツクナリ。又無縁ノ者并

ニ疾アル者。貧キ者ニ稱ヲ賜フ。高市皇子ヲ太政

大臣トシ。丹比島ヲ右大臣トス。其外八省百官等

皆是ヲ置群臣一儀被ヲ增加へ皇女并ニ命婦ニ
モ位ヲ授皇女ヲ内親王ト云フコトモ又女人ノ位ニ
ス、ムコトモコレヨリ始メ天皇年々吉野へ行幸アリ
又アルキ伊勢國へ行幸アルベシト沙汰アリシカバ
中納言三輪高市麻呂農業ヲ妨シコトヲ慮テシキ
リニ諫メ申セドモ許容ナク遂ニ行幸アリ伊賀伊
勢志摩ノ年貢ヲ減シ老人ニ稱ヲ賜フ又藤原ノ内
裏ヲ造テ都ヲ遷サル其後高市皇子薨セラル天皇
イツレノ皇子ヲカ太子トスベキト沙汰アリ葛野王
ト云ル臣ノ申ニヨリテ草壁太子ノ子珂瑠王ヲ太
子ニ定メラル其後天皇不例ナリシカバ在位十一年
ニテ位ヲ珂瑠太子ニ讓ル文武天皇是ナリ持統ニハ

太上天皇ノ尊号ヲ奉ル存生ノ内ニ位ヲ讓ルコトハ皇極
ニ始ルトイヘドモ太上天皇ノ尊号アルコトハ持統ヨリ
始レリ

四十二代

文武天皇 天武ノ孫草壁太子ノ子ナリ祖母持統ノ

讓リサウケテ即位ス

元年藤原宮子媛ヲ夫人トス藤原不比等ノ娘ナリ木
比等ハ大織冠ノ子ナリ後ニ淡海公ト云レハ是ナリ
一年役小角ヲ伊豆嶋ニ流ス小角ハ役行者ノ事ナリ
此人怪キ術ヲ知テ大和國葛城山ニ住テ鬼神ヲ召
カレ其下知ニ從ハサル神ヲハ是ヲ捕ヘ縛ル韓國廣足
「云者行者ヲ師トシ其術ヲ習ヒケルガ怪キコトニテ

人ヲ惑ス由。奏聞スルニヨリテ。行者ヲ流罪セラレ。年ヲ
歴テ赦免セラレ

四年。道昭ト云ル僧病死ス。是ヲ火葬ス。日本ニテ火
葬ノ始ナリ。此僧若キ時。入唐シ學問シテ。返朝ノ後。元
興寺ニ住ケルガ。天下ヲ廻リアリキ。方々ノ津濟ニ船ヲ
設ケ橋ヲ造ルコト多シ。山城國宇治橋モ此僧ノ始
テカクル所ナリ。同年藤原不比等等ニ詔シテ。律令ヲ
撰シム。律六卷。令十一卷アリ。律ハ法度ノ定メナリ。令
ハ政務ノ下知ヲキテナリ。此二部ハ後世ニテノ重寶ナル。
大寶元年正月元日。天皇大極殿ニ出御アリ。御門ノ
正面ニ鳥形ノ旗ヲ立。左ニ八日ノ旗。青龍旗。朱雀ノ旗ヲ
タテ。右ニ八月ノ旗。玄武ノ旗。白虎ノ旗ヲタテタリ。百官

朝拜シ。異國ノ使者ハ旗左右ニ並居タリ。後世ニテ大
禮アルトキニ。其儀式如此トナシ。同月大納言大伴
御行卒ス。右大臣ヲ贈ラル。是贈官ノ始ナリ。二月丁
巳。大學寮ニテ。始テ釋奠ヲ執行ヒテ。孔子ヲ祭リタマ
フ。是ヨリ年々春秋ヲコタルコトナシ。五月粟田真人
ニ節刀ヲ賜リ。遣唐使トス。相從フ屬官多シ。七月。
左大臣多治比島薨ス。歳七十八。
二月十月。太上天皇持統參河國ニ御幸ス。十一月。
大和ニ歸リ。十二月崩御ニシマス。
三年正月。朝禮ヲヤメラレ。太上天皇ノタメニ齋ヲ設ケ
ラル。三品刑部親王ニ知大政官事ト云官ヲ授テ。
國政ヲ執レム。此人ハ天皇ノ叔父ナリ。四月右大臣阿

倍御主人薨ス 十二月ニ持統天皇ヲ飛鳥岡ニ火葬ス帝王火葬ノ始ナリ

慶雲元年正月石上麻呂ヲ右大臣トス七月遣唐使粟田真人歸朝ス田二十町米千石ヲ賜リテ勞ハル此人大唐ニテ則天皇后ニ見ヘ麟德殿ニテ宴ヲ賜ル文才器量勝レテ衣冠シテ參内セル威儀神妙ナリト異朝ノ書ニモ記セリ

二年諸國飢饉疫病シケレハ醫藥ヲ賜リテ是ヲ救ス四年五月讚岐國人錦部刀良筑後國人許勢形見等ニ衣服并ニ塩米ヲ賜ル是ハ天智ノ御時百濟ノ加勢ノ中ニアリテ唐人ニ生捕レ四十餘年異國ニアリテ粟田真人ニ從テ歸朝セリ 六月天皇崩御

シタマフ御生レツキユルヤカニシテ仁愛ナリ學問ヲ好ミ詩ヲ作リ又射藝ニモ達シタマフ御歳ワツカニ二十五在位ノ始四年八年号ナシ 大寶三年慶雲四年合テ十一年ナリ孝德天皇ノ大化ヨリ年号始ルトイヘトモ其以後或ハ年号ヲ立或ハタテラレス大寶ヨリ以後八年号絶ルコトナシ

四十三代

元明天皇女帝 天智ノ娘持統ノ妹草壁太子ノ妃文武ノ母ナリ文武崩ジテ其子聖武幼少ナルハ文武ノ遺言ニヨリテ元明即位ス其明年ノ春武藏ノ國ヨリ和銅ヲ獻スルニヨリテ即千年号ニ用ラル和銅元年三月石上麻呂左大臣トナル藤原不比等右大臣トナル

二年三月。陸奥越後ノ夷叛キケレハ。將軍ヲ遣シ是ヲ平ク。五月。新羅使金信福來テ貢物ヲ捧ク。藤原不比等は是ニ對面ス。信福日本ノ大臣ニ逢コトヲ悦テ拜ス。

三年三月。都ヲ平城ニ遷ス。此遷都ノコトハ文武ノ末ノ年ヨリ其沙汰アリコトニイタリテ内裏成就セル。藤原不比等興福寺ヲ平城ニ造ル。平城ハ奈良ナリ。

四年。太安麻呂古事記三卷ヲ作ル。

五年。始テ陸奥ノ國ヲ分テ出羽國ヲ置。

六年。丹波ヲ分テ丹後トシ。備前ヲ分テ美作ヲ置。日向ヲ分テ大隅ヲ置。

同年。諸國ノ風土記ヲ作ラシム。此記ニハ國々ノ郡郷山河原野并ニ其土産草木

鳥獸ニ至ルミテシル。其上其國々々ニテ云傳タル昔ノ物語ニテ。書ノセタリ。又信濃ト美濃ト。堺道セハクケハシク。往來難議ナルニヨリテ。始テ木曾路ヲ開テ通ラシム。

七年。大和國ニ孝行ノ者二人アリ。詔シテ其人身ヲ終ルニテ公役ヲ免ス。惣シテ此比ハ孝子順孫義夫節婦ノキコヘアルモノヲハ褒美セララル。

八年。天皇位ヲ御娘元正ニ讓リ。太上天皇ト稱ス。在位八年。年号和銅。

四十四代

元正天皇 女帝 元明ノ娘。文武ノ跡ナリ。元明ノ讓リテケテ即位。年号ヲ靈龜ト号ス。

靈龜二年。高麗人千七百九十九人ヲ武藏國遷
シ。其所ヲ高麗郡ト号ス。同年。多治比縣守ヲ遣唐
使トス。藤原宇合ヲ副使トス。吉備大臣。此時ハイ一タ
下道真補ト云テ。二十三歳ナリ。阿倍仲麻呂十六歳
二人共ニ學問ノ爲ニ縣守ニ從テ入唐

養老元年三月。左大臣石上麻呂薨ス。歳七十八。九月。
近江國へ行幸。山陰山陽南海道ノ國司參リツトヒ
テ歌舞ス。其ヨリ美濃國へ行幸。東海東山北陸道
ノ國司來リツトヒテ。雜伎ヲ奏ス。美濃國當耆郡
多度山ニ泉アリ。コレニテ手ヲアラヒ。面ヲアラヘ。皮
層ナメラカニナレリ。又痛ミアル所ヲアラヘ。ハタチ一
チ愈。又是ヲ飲。或ハ是ニ浴スレ。ハ白髮モ黒クナリ。又ケタ

ル髮モ再生シ。眼精モ明ニナリ。イヘリ。天皇此トコロへ
行幸ナリ。此泉ハ老ヲ養フヘト仰セラレ。即年号ヲ
養老ト号ス。俗ニ謂ル養老ノ瀧是ナリ
二年五月。越前ヲ分テ能登トシ。下総ヲ分テ安房トス
十二月。多治比縣守。大唐ヨリ歸ル。同年。右大臣藤
原不比等ニ命ジテ。重テ律令各十卷ヲ修セシム
四年五月。一品舍人親王。日本紀三十卷ヲ作テ奉ル
神ハヨリ持統天皇ニテテ。詳ニ記セリ。舍人ハ美武ノ
子ナリ。八月。右大臣藤原不比等薨ス。歳六十二。太
政大臣正一位ヲ贈ラレ。文忠公ト謚ス。淡海公是ナリ。
舍人親王ヲ以テ。知太政官事トシテ。政ヲ行ハシム
今年。大隅ノ隼人。陸奥ノ蝦夷謀叛シケレ。ハ東西へ將軍

ヲ遣シテ平ケレム

五年正月長屋王ヲ右大臣トス

明經博士并ニ才藝

アル者ニ物ヲタミフ

十二月太上天皇

元明

崩ス歲

六十一

八年正月天皇位ヲ聖武ニ讓ル太上天皇ト号ス在

位靈龜二年養老七年合テ九年

四十五代

聖武天皇

文武ノ太子ナリ母ハ藤原夫人宮子ト云フ

贈太政大臣藤原不比等ノ娘也文武崩スルトキ聖武

幼少ナルニヨリテ即位セス元明ノ代ニ十四歳ニテ太子

トナリ元正ノ代ニ政ヲアツカリ聞タミフユ、ニイタリテ

讓リラウケテ位ニツク

神龜元年二月右大臣長屋王左大臣トナル 十月紀

伊國玉津嶋弱浦ニ行幸

四年勅使ヲ諸國へ遣シ國所ノ政ヲ改メシム又百官ノ

善惡ヲ紀ス

五年渤海使者來テ貢物ヲ奉ル渤海ハ高麗ノ部類ナ

リコレヨリサキ高麗國ハ大唐ニ滅サル其ワツカニノコル

者ヲ渤海國ト号ス

天平元年正月左大臣長屋王逆心ノ聞ヘアリケレハ式

部卿藤原宇合等ヲ遣シテ長屋王カ家ヲ圍ミ又舍人

親王等ヲ遣シテ其罪ヲ問シ長屋王自害ス其妻子

皆殺サル長屋王ハ大武ノ孫高市皇子ノ子ナリ

八月藤原光明子ヲ立テ皇后トス是モ不比等ノ娘

ナリ。夫皇公不比等ノタニニ外孫ナル上ニ又婿ナレバ藤
氏ノ繁昌此時ヨリ起レリ。

二年正月百官ヲ宴シ仁我禮智信ノ五字ヲ札ニカキ
是ヲトラシメ其字ニヨリテ物ヲ賜フ事差アリ

二月釋奠勅使ヲ大學寮京ニ遣シ博士等ヲ勞ヒ物ヲ
賜ル 四月始テ施藥院ヲ立テ民ノ疾アルモノヲメグム

四年多治比廣成ヲ遣唐使トス
六年藤原武智麻呂右大臣トナル不比等ノ長男ナリ次

男ヲ房前ト云此時參議ノ官ニテ政ニアツカル其三男
ヲ式部卿宇合ト云其四男ヲ左京大夫麻呂ト云

七年三月多治比廣成大唐ヨリ歸ル此人玄宗皇帝
ニ謁シ名ヲ異朝ニアラハス下道真備吉備大臣モ此時飯

朝シ書物其外様々ノ器ヲ持テ飯レリ又孔子顔子并
九哲ノ像ヲモ持テ參レリ在唐ノ間二十年ニ及ヘリ今年

夏ヨリ冬ニ生ルニテ天下既豆瘡ト云モノハヤリテ病
死スル者多シ俗ニ是ヲモカサトモ云今ノ疱瘡ナルヘ

シ 十一月一品舍人親王薨ス歲六十太政大臣ヲ
贈ラル八年南天竺僧善提林邑國僧佛哲來朝ス

同年從二位葛城王ニ橘姓ヲ賜リ名ヲ諸兄ト改ム
橘姓是ヨリ初ル

九年四月參議藤原房前卒ス歲五十七 七月
參議藤原麻呂卒ス歲四十三 同月右大臣藤原

武智麻呂薨ス歲五十八其病中ニ正一位ヲ授ケテレ
左大臣ニ任セラレ 八月ニ參議藤原宇合卒ス歲四

十四此人ハ皆不比等ノ子ニテ。天皇ノ舅ナリ兄弟四
人。同年ニ皆モカサニテ。武智麻呂ノ家ハ南ニ
アルニヨリテ。南家ト云フ。前ノ家ハ北ニテ。ルニヨリ
テ。北家ト云フ。次男ナレトモ。此人ノ子孫繁昌シテ。今
ニ至ルニテ。攝家ハ皆此キナリ。宇合ハ式部卿ヲ兼ル
ニヨリテ。式家ト云フ。此人ハ文武ノ才アル人ニテ。名ヲ異
國ニテ。躰セリ。麻呂ハ左大臣大夫ヲ兼ルニヨリテ。京家
ト云フ。後世藤原氏ノ末葉ニ甚タ多シトイヘドモ。皆此四
家ヨリ出サルハナシ。天皇ノ御母藤原大夫人宮子。
久ク疾ニカ、リテ。人ニ逢フコトナシ。此年ノ冬。皇后ノ御
方ニテ。僧正玄昉ヲ一目ニ御覽シテ。快ク笑ヒタミイテ。
天皇トモ久々ニテ。對面アリ。上下目出度ト云フ。コ

レニヨリテ。綿布ヲ玄昉ニ賜ル

十年正月。御娘阿倍内親王ヲ。太子ニ立ラル。孝謙大
皇是ナリ。天皇皇子一人アリトイヘドモ。世ニヨリ
テ。如此橋諸兄ヲ右大臣ニ任セラレ
十二年八月。大宰少貳藤原廣嗣上表シテ。時ノ政
ノ得失ヲ申シ。下道真備ト僧正玄昉世ヲ乱ル間コ
レヲ除ク下言上シ。九月遂ニ筑紫ニテ謀叛ス。コレニ
ヨリテ。大野東人ヲ大將軍トシ。紀飯麻呂ヲ副將
軍トシ。諸國ノ軍勢一萬七千人ヲ添テ。又佐伯常人阿
倍虫麻呂ニ。四千人ヲ添テ。相共ニ廣嗣ヲ討シ。伊勢
太神宮へ勅使ヲ立ラレ。奉幣シ祈請セラレ。取ルノ關
所へ軍兵ヲ遣シ守シ。廣嗣ハ肥前ノ國遠珂ノ郡

二城ヲカマヘ板橋ト云取ニ出張ス 十月大將軍
大野東人板橋河ニテ廣嗣ガ万騎ノ兵ト合戰廣
嗣ガ前手ノ兵木ヲ編テ船トシ河ヲ渡ントス常人
虫麻呂大弓ヲ放テ射ケレハ敵進マラス常人等
六千餘人ヲ帥テ進ニ廣嗣ニ言テ懸テ呼ケレハ廣嗣
馬ニ騎テ進出テ勅使ハ何人ソト問フ常人某々ト
答ケレハ廣嗣馬ヨリ下テ我本ヨリ朝廷ヘ坂カス只
真備ト玄昉トニ怨アリト云常人然ハ何トテ大軍
ヲ起シ官軍ニ向テ戰マト云廣嗣答ルコトアタハスシ
テ退ク廣嗣自ラ五千人ヲ帥ヒ其ノ弟細手ニ五千
人ヲ添又多胡古麻呂ニ兵ヲ添テ三手ニ分レテ進ム
廣嗣カ一手先進テ二手ハイニ夕到サル内ニ官軍急

ニ攻ケレハ廣嗣戰負テ船ニ乘テ異國ヘ逃トスル処ニ肥前
國松浦郡長野村ニテ官軍ノ内安倍黒麻呂ト云
者廣嗣ヲ生取テ則是ヲ斬ル細手モ同ク殺サレ或説
ニ廣嗣駿馬ニ騎テ海ヘ飛入テ其靈タリヲテスニヨリテ松
浦ニ社ヲ立テ神ト崇ト云リ廣嗣公宇合ガ子ナリ
廣嗣乱ノ内ニ天皇伊勢ノ國ヘ行幸アリ大神宮ヘモ
奉幣シ給テ美濃伊賀ヲ歷テ山城ノ國相樂郡ニ都
ヲ遷シ内裏ヲ作ル是ヲ恭仁宮トイフ廣嗣カ同類ノ
罪ヲ定メ東人飯麻呂常人虫麻呂等ニ位ヲ授ケル
十四年近江國甲賀郡紫香樂宮ニ行幸其ヨリ右大
臣橘諸兄ヲ伊勢大神宮ヘ遣サル
十五年正月ニ太宰府ヨリ腹赤ノ魚ヲ獻ル是ヨリ

毎年元日ノ節會ニ此魚ヲ用ラル 五月右大臣橘
諸兄左大臣ニ任ス 十月紫香樂官ニ行幸僧行
基ヲシテ天下ヲ勸進セシメ盧舍那ノ金銅大像ヲ
作ル

十六年春都ヲ攝津國難波ニ遷ス 十一月紫香
樂官ノ寺ニ始テ大佛ヲ立ツ天皇自ヲ其繩ヲヒク
太上天皇 元正 毛御幸アリ

十七年正月行基ヲ大僧正トス 八月紫香樂官ノ
大佛ヲ奈良ニ遷ス

十八年玄昉死ス此僧入唐ニ歸朝ノ時經論五千餘
卷并ニ佛像ヲ持テ來ル天皇紫袿袿ヲ給テ榮寵ア
リシカ沙門ノ行ニシムクアアルニヨリテ人皆慕ヒ此時

筑紫ニウツサレテ死ス或説ニハ廣嗣ガ怨靈ニ害セラル
ト云リ

十九年太上天皇 元正 不例ニテ明レハ二十年四月六
十九歳ニテ崩御其遺善ノ爲ニ法華經千部ヲ寫ス
八月釋奠ノ服器及儀式ヲ定メラル

二十一年正月天下殺生ヲ禁ジ行基ヲ召シ大菩薩
ノ号ヲ授ラル 二月行基病死歳八十此僧少キ時ヨリ
諸國ヲメグリアリキ所々ニ橋作堤ヲ築ク其留リ住

スル處ニハ必道場ヲ立タリ畿内ニモ四十九處アリ天皇
甚歸依シ給フ陸奥國司百濟王敬福始テ黄金ヲ貢
當國小田ノ郡ヨリ出ル處ナリ 四月天皇東大寺ニ
行幸シ北面シテ佛像ニ向ヒ自ニ寶奴ト稱ス皇后太子

群臣皆伺候ス。橘諸兄ヲシテ。佛像ニ向ヒ。陸奥ノ國ヨリ。黄金ヲ出ス。テ告ク。コレヨリサキ。天皇大佛ノ料ニ黄金ヲ異國ヘ求ントス。然ルニ奥州ヨリ始テ奉リシカバ大ニ喜ズ。三月又奥州ヨリ黄金九百兩ヲ奉ル皆大佛ノ料ニ用ヒス。同月左大臣橘諸兄正一位ニ叙シ。大納言藤原豊成。右大臣ニ任セラル。七月天皇位ヲ太子ニ譲リ。太上天皇ト称ス。天皇在位。神龜五年。天平二十年。合テ二十五年。

四十六代

孝謙天皇女帝 聖武ノ娘ナリ。母ハ光明皇后。藤原不比等ノ娘ナリ。聖武男子ナキニヨリテ。孝謙ヲ太子トス。吉備公ヲ師トシテ學問シ給フ。聖武ノ讓ヲ受テ即位ス。

天平勝寶元年。八幡大神ノ詔宣ニヨリテ。大和國平郡ニ。神宮ヲ作ル。東大寺ノ八幡是ナリ。天皇モ太上天皇モ光明皇后モ。東大寺ヘ行幸アリテ。僧ヲ聚メ經ヲ讀シム。二年。藤原清河。天作古麻呂。吉備真備ヲ遣唐使トス。四年四月。大佛開眼供養。天皇東大寺ヘ行幸。百官供奉其儀式。元日ニ同シ。天皇寺ヨリ飯ル時。大納言藤原仲麻呂。カ田村ノ家ニ入給ヒテ。其處ヲ御在所トセラル。仲麻呂寵臣タル故ナリ。六年正月。遣唐使大伴古麻呂。吉備真備歸朝ス。藤原清河。大唐ニ止テ不歸。古麻呂奏聞シケル。公大唐ニアリシ時。正月元日。玄宗皇帝出御アリテ。諸國ノ使者ニ對面。時西ノ一ノ座。吐蕃國ノ使者。東ノ一ノ座。新羅ノ

使者ナリ日本ノ使者ハ西ノ二ノ座タルハ。大食國ノ使者
ハ東ノ二ノ座タルベシト定メラル。其時古麻呂イカリテ新
羅古ヨリ今ニイタルニテ。日本へ從ス。イカテカ日本ノ使
者ヲ彼ガ下ニ置ヤト。ハカラス申ケレハ。大唐ノ將軍兵
懷實其色ヲ見テ。日本ノ使者ヲ大食國ノ上ニ置キ。東ノ
一ノ座トス。新羅ノ使者ヲハ西ノ二ノ座ニ置ケリト云
此時唐僧鑑真從テ來朝ス。古麻呂吉備皆位ヲ進
メラル

八年二月。左大臣正一。位橘諸兄。逆心アリト申スモノ
アリ。天皇許容セス。諸兄ヲソレテ。官職ヲ辭メ致仕ス
五月。太上天皇。聖武。崩ス。歲五十六。甚佛法ヲ好ニヨリ。
テ。落飾シテ。法諱ヲ勝滿ト云。帝王ノ髮ヲソルハ。聖武

ヨリ始ニル。太上天皇ノ遺言ニテ。道祖王ヲ太子トセ
ラル。是ハ天武ノ孫。新田ノ皇子ノ子ナリ

天平寶字元年。橘諸兄薨ス。歲七十四。并手大臣ト号
ス。三月。太子道祖王ヲステ。其家ニ歸ラシム。右大
臣藤原豐成。帝ノ遺言ナレハ。如何ト申シケレトモ。天
皇ノ心ニカナハサルニヨリテ。如此。四月。親王ノ内。孰カ
太子トスベキト沙汰アリシニ。豐成等申ス旨アリトイ
ヘトモ許容ナク。藤原仲麻呂ガ申スニヨリテ。大炊王
ヲ太子トセラル。此モ天武ノ孫。舍人親王ノ子ナリ
五月。天皇藤原仲麻呂ガ田村ノ宮ニ遷リシニ。仲
麻呂ニ紫微内相ト云ヘル官ヲ授テ。内外ノ武官ヲツカ
サドラシム。其作法大臣ノ如シ。豐成ハ仲麻呂カ元ニテ。

右大臣タレトモ仲麻呂寵臣タルニヨリテ其權威甚
フルヒケレハ豊成ト不和ナリ此二人公不比等ノ孫武
智麻呂カ子ナリ。此時橘諸兄カ子ニ奈良麻呂ト云者
アリ仲麻呂ガ權柄ヲホレイマニスルコトヲ怒リ大伴
古麻呂等ヲカタラヒ仲麻呂ヲ殺シ道祖王ヲトリタ
テ天皇ノ位ヲトリカヘントハカル此事豊成風聞殺仲麻
呂ヲ教誨スヘシ乱ヲラコスベカラスト止ム其内ニ早事
露レシカハ仲麻呂大ニ怒テ則奏聞シ奈良麻呂其外
同類ヲトラエテ盡ク殺ス道祖王モ害セラレ豊成モ
此事知ナカラ奏聞セザル罪カロカラストテ筑紫へ流
罪セラレ明年八月天皇位ヲ太子大炊王ニ讓ル孝謙
ヲハ高野天皇ト申ス在位天平勝寶八年天平寶

字二年。合テ十年。

四十七代

廢帝 天武ノ孫舍人親王ノ子ナリ藤原仲麻呂カ
ハカラヒニテ太子ニ立ツ
天平寶字二年八月孝謙 讓ヲ受テ即位仲麻呂
ヲ大保ニ任セラレ大保ハ右大臣ナリ此時勅アリテ
云ク仲麻呂其曾祖大織冠ヨリコノカタ國ノ佐ナレ
テ天下無事ナリ其ヒロク民ヲ惠メ美ナル古ヨリ並
ナレ又惡人ヲ押ヘ乱ニ勝ツ功アリテ其姓名ヲ
藤原惠美押勝ト給ハル俗説ニ孝謙押勝ヲ御覽シテハ三
ワラフセ給フユニ惠美ト云ハ誤ナリ
十二月大磨ニ安祿山乱ヲコレ世ヲ奪フ由日本へ
聞ユルニヨリテ安祿山本意ヲトゲスシテ若日本ノ海

上へヤウカ、ヒキタルベキモ、ハカリガタシ。采々ニ其用心
ヲスベシト下知ス
三年六月、御父舍人親王ヲ謚ノ崇道盡敬皇帝ト云
四年正月、諸國へ使ヲ遣メ、其國ノ風俗ヲ見セシム
同月、天皇及孝謙相謀テ、押勝ニ從一位ヲ授ケ、大師
ニ任セラシメ、大師ハ太政大臣ナリ。天皇及孝謙、度々押
勝カ家ニ行幸アリ。六月、光明皇太后崩ス。歲六
十。八月、勅スラク藤原不比等ハ其功高ク、且朝廷
ノ外戚ナレバ、齊ノ太公カ例ニ准メ、近江ノ國十二郡
ヲ以テ、是ヲ封メ、淡海公ト号スヘシ。淡海ハ近江ノ
事ナリ。又押勝請ニヨリテ、武智麻呂房前並ニ
太政大臣ヲ贈ラル

五年、都ヲ近江國保良ニ遷ス

六年二月、押勝ニ正一位ヲ授ケ、頃日弓削道鏡ト云ル
僧、孝謙ノノハ近ク侍テ、寵愛甚シ。天皇然ルヘカラズト
諫メラルル此ニヨリテ、二帝ノ御中不和ニナリケレハ、孝
謙保良ノ都ヨリ奈良ヘ歸ル。天皇モ又奈良ヘ歸ル。其
後孝謙落飾、法諱ハ法基ト云、五位以上ノ者ヲ召テ曰
我巳ニ出家ス、然レトモ國家ノ大事、賞罰ノ一ヲハ、我自
決スヘシ。其外ノ事ハ、當今ノ帝ニ任ス
七年、高麗使王新福來テ、貢ヲ奉ル。押勝ガニテ、宴ヲ設ケ、
八年九月、押勝權サカリナリト云ヘトモ、道鏡ガ常ニ
孝謙ノ御前ニ侍テ、其恩寵已ガ上ニアルコトヲ憤
リテ、常ニ心モトナク、ヲモヒテ、秘ニ太政官ノ印ヲ用

テ。軍兵ヲ召アツメ。用心シケレハ孝謙是ヲ聞テ。少納言山村王ヲ遣メ。其印ヲ取收シム。押勝其子訓儒麻呂シレテ。此ヲ奪レム。此時坂上田麻呂勅ヲ承テ訓儒麻呂ヲ射殺ス。押勝又矢田部老ヲシレテ。甲冑ヲ著レ馬ニノセテ。山村王ヲシヒヤカス。紀船守勅ヲ承テ。矢田部老ヲ射殺ス。ゴ、ニライテ。押勝ガ官位ヲ削ル。押勝其同類ヲ召ツレテ。近江國へ走ル。藤原良繼等ノ官軍追懸。尿々ニテ合戦ス。高嶋三尾崎ニテ。佐伯三野ナト云ル官軍。押勝子真光等ト。午ノ刻ヨリ申ノ刻マデ戦テ。官軍少ツカレテ。尿へ。勝原藏下麻呂新手ニテ馳來ル。二野モ又進。各外ノ諸大將モ。水陸ヨリ攻カ、リケレハ。押勝カ兵皆亡ヌ。其妻子ト共ニ船ニテラントスル所ヲ。官兵石村々主ト云者。押勝ノ生捕テ討斬。其首ヲ京へ送ル。真光等以下。其徒黨二十餘人皆一所ニテ殺サル。又道祖王ノ兄塩焼王モ。押勝同類ノ聞へアルニヨリテ。同害セラル。押勝カ兄豊成。其罪ヲナダメテ呼出レ。本ノ如ク右大臣トス。又道鏡ヲ大臣禪師トシテ。政ヲ行シム。十月孝謙山村王等ヲ遣シ。内裏ヲ圍ム。當今ノ帝モ。押勝ト同類ニテ。孝謙ヲ害スル謀アリトテ。帝位ヲヒラロレ。淡路國へ流ス。在位六年ナリ。孝謙ノ天平寶字ノ年号ヲ用ヒテ。別二年号ヲ立ス。明年淡路國ニテ崩セラル。實ハ弒ラル、ナルへ。歳三十三。淡路ノ廢帝トハ是ナリ。

四十八代

稱徳天皇

女帝

即孝謙

ナリ

廢帝ヲ押ノケ再位ヲ踐其

重祚ヲ稱徳ト云ナリ。皇極齊明。帝ニテ二号アル例

ナリ

天平神護元年十月道鏡ニ太政大臣禪師ノ位ヲ授

テ文武百官ヲシテ拜賀セシム。十一月。右大臣從一

位藤原豊成薨ス。歲六十二

二年正月藤原末手右大臣ニ任ス。吉備真備ヲ大納

言トス。十月。道鏡ニ法王ノ位ヲ授ク。藤原末手ヲ

左大臣トシ吉備真備ヲ右大臣トス。此人再入唐傳

學ノ譽アルニヨリテ。微賤ヨリ次第ニ登庸レテ。大臣ニ

イタル世ニ謂ユル吉備大臣是ナリ

神護景雲元年二月。釋奠。天皇自大學寮へ行幸ア

リ。三月。越智泰澄死ス。此越前白山ヲ開ク人ナリ

七月。僧勝道始テ下野國ニ荒山ヲ開ク。日光山是ナリ

二年十月。大學助教膳臣大丘奏聞レケル。大唐ノ

天子孔子ヲ尊テ文宣王ト謚ス。然ラハ日本ニテモ其

例ニ任セ。文宣王ト申サント請フ。則勅詔セラレ

十一月。始テ春日神社ヲ大和國三笠山ニ立テ。武雷

命。天兒屋根命。齊主命。姬大神ヲ祭ル

三年正月。道鏡内裏ノ西宮ニ居ル。大臣以下皆出仕

二月。左大臣末手カ宅ニ行幸。右大臣吉備カ宅ヘモ

行幸アリ。五月。天皇ノ妹不破内親王ハ塩焼王カ妻

ナリ。塩焼殺サレテ後其子氷上志計志麻呂ト密談

シ。天皇ヲノロヒケル由露頭ニヨリテ。内親王ハ京中ヲ

逐出サレ志計志麻呂公上佐ノ國へ流サル 九月大
宰府ノ阿曾麻呂ト云者道鏡ガ威勢ノ強キヲ見テゴヒ
ヘツラヒ宇佐八幡ノ謚宣ト稱シテ道鏡ヲ帝位ニ即シ
ムハ天下泰平ナラント云道鏡悦テ天皇ニ申ス天皇道
鏡ヲ愛スルコト甚レトイヘドモ帝位ノコトハ私ナラ
ヌコトナレハ宇佐へ勅使ヲ遣シ其神謚ニ任セテ夾
セント宣フ道鏡然ルヘシト申ス天皇和氣清麻呂
又啓テ白クハ幡大神夢ノ告アリ汝ヲ勅使トシテ宇佐
ニ遣スヘシ能敬テ神謚ヲ聞テ既レト云云清麻呂御前
ヲ退クトキ道鏡人ヲレリソケテサヤキケルハ此度ノ
勅使ハ我ニ帝位ヲ讓テルヘキヤ否トハ幡大神ニ問ル
トコロナリ其心得ヲ以テ神謚ヲ言上スヘシ汝ガ返事

ニヨリテ我即位セバ汝ヲ大臣トナシテ國ノ政ヲ任ス
レ若返事悪クハ重キ罪ニ行フヘシトテ眼ヲイカラカ
レカニ手ヲカケテフトス清麻呂宇佐へ參詣シ是ハ國
家ノ大事ナリ縱ヒ謚宣アリトモ率余ニハ信レカタシ
願クハ一ノ不思議ヲ示シタニト祈念シケレハ大神怒
チ長三丈ハカリノ形ヲ現シテ影向アリ其光リ滿月ノ
コトレ清麻呂伏拜シテ仰ギ見ルコトアタハス神謚ニ
曰ク我國ノ天ツ日嗣ハ神代ヨリ代々皇胤ノ外臣トシ
テ伺フヘキニアラス況ヤ無道ノ者ヲヤ汝既ニアリクニ
ニ申スヘシ道鏡ヲ畏ルコトナカレト云云清麻呂元來
忠節ノ者ナレハ神謚肝ニ銘シテ都ニ既リ參内ス道鏡
御前ニ侍テ椅子ニヨリカカリ清麻呂ヲ呼テ神謚イ

カニト問。清麻呂少モ誦ラハスナリノミ、ニ奏聞ス。天皇
モイト興ナク思召。道鏡大ニ怒テ。眼ノ色ハ血ノゴトク
赤ナリ。其面或ハ青クナリ。或ハ赤クナリ。大息ツイテ。清
麻呂ヲ睨ミ申シケル。彼已カ心ヲ以テ神託ヲ詐リテ
申スナルヘシクセゴトナリ。死罪ニ處スヘシ。天皇死罪ニ
テハイカニトナタメタニ。公道鏡怒テ。清麻呂カ名ヲ
穢麻呂トツケカヘテ。其足ノ筋ヲタチテ。大隅國ヘ流ス
路次ニテ。清麻呂ヲ殺スヘシト。道鏡ハカリケレトモ。其
折節雷雨甚クシテ。タメラフウチニ。勅使來テ死罪
ヲナタム。清麻呂足ノ筋ヲタレテ。行步叶ハサリシガ。
宇佐ハ幡ヘ參詣シケレハ不思議ノコト。モアリ
テ。足ノ筋忽チナラリテ。行步本ノゴトクナリタリト

イヒ傳タリ藤原百川ト云ル人。清麻呂カ忠節ニアハ
レニテ。備後國ニ其私領アリケル。分テ清麻呂カ配所
ヘ贈ル。同年十月。大宰府ノ學校。五經ハカリテ讀習
ニ。史ナキニヨリテ。所望ノ由奏聞スルニヨリテ。史記漢
書。後漢書。三國志。晉書ヲ賜ル

四年二月。天皇河内ノ由義宮ニ行幸アリ。道鏡非常
ノ怪キ食物ヲ奉ル。四月。都ヘ還御アリシガ。六月ヨリ
不例ニテ。様々御藥ヲス。ムレトモ。驗ナシ。群臣謁見
スルコトナシ。道鏡弥ホシヒニナリ。人皆アヤブム。八
月。天皇遂ニ崩御アリ。歲五十三。年号天平神護二年。
神護景雲四年。合テ六年前ノ十年ヲ合テ。凡在位十
六年ナリ。左大臣藤原ノ永手。右大臣吉備真備等相談

皇子ノ内誰カ即位セシムベキト云群臣申スところ
區々ナリシニ藤原百川ト藤原良繼ト策ヲ合セ未
手ヲスメテ白壁王ヲ立テ太子トシ道鏡ハ稱徳天
皇ノ陵ノ下ニ居シテ太子及未手等ガハカラヒミ下
野ヘ流シ薬師寺ノ別當トス世ヲ篡ントセル悪人ナレ
ドモ先帝ノ御恩深キ者ナルニヨリテ死罪ヲ免ストナ
シ年ヲ歷テ道鏡下野國ニテ病死ス和氣ノ清麻呂
ヲ都ヘ呼飯ス

四十九代

光仁天皇

御名ヲ白壁王ト申ス天智天皇ノ孫施
基皇子ノ子ナリ聖武稱徳ニ仕ヘテ大納言ニテ昇進
ス稱徳天皇崩御ノ後未手并ニ百川等ガハカラヒ

皇子討レテ天武即位アリシカハ天智ノ子孫衰テ
微々ナリレガコニ至リテ天武ノ王孫ハ却テ絶ニ天
智ノ嫡流王統ヲ繼リ寶龜元年十月從一位左大
臣藤原末手ニ正一位ヲ授クヨリサキ橘諸兄惠
美押勝正一位ニ進ム末手ヲ加テ二人ノ外ハ存生
ノ内ニ昇ルハナシ此以後ハ皆贈位ナリ十一月御父
施基皇子ヲ田原皇子ト謚ス十二月末手ニ山城
國ノ内ニ百町ノ郷ヲタメハル
二年二月左大臣末手薨ス年五十八淡海公ノ孫
房前ノ子ナリ 三日右大臣吉備真備致仕ス大
中臣清麻呂ヲ右大臣トス藤原良繼ヲ内臣トス

十一月大嘗會ヲ行フ。參河國ヲ由機トシ。因幡國ヲ
須岐トス。其儀式ユ、レク備ハレリ。凡大嘗會ハ帝王
一代ニ一度行ハル、大礼ナリ。

三年。渤海國ノ使者壹萬福來テ貢物ヲ奉ル。其表
无礼ナリトテ。壹萬福ニ責問ル、旨アリ。様々謝スル
ニヨリテ。返簡ヲ賜ハ。天皇ノ后ヲ井上内親王ト
云フ。其産ル子ヲ他ノ親王ト云フ。立テ太子トス。天皇
ノ第一ノ皇子ヲ山部親王ト云フ。參議藤原百川山
部ヲ太子トセマクホツシテ。謀ヲメクラスカ、ルトコロ
ニ井上皇后。天皇ト中惡クナリテ。潛ニ天皇ヲノロ
ヒ。他ノ太子ヲ早ク即位セシメントハカル事顯シケレ
ハ。百川奏聞シテ。皇后及ビ他ノ太子ヲアヒシロス。其
後何レノ皇子カ太子トスベキト沙汰アリ。百川第一
ノ皇子ナレバ。山部親王ニカルヘシト申ス。天皇ハ皇女
酒入内親王ヲ立ント宣フ。藤原濱成ハ山部ハ母イヤシ
ケレバイカ、ナリ。第二ノ皇子稗田親王然ルベシト云フ。
百川太子ノ位ハ母ノ貴賤ニヨラスト云。天皇タメラヒテ
決セズ。百川齒ヲクヒシバ。殿前ニ立テ。四十餘日ノ
間。少モ睡ス。太子ノ定ルヲ聞ス。ハ退出スヘカラスト。
堅ク思ツメタル氣色ナレバ。天皇モ止コトラ得スレ
テ許容シ。山部ヲ立テ太子トス。時ノ人百川ガ二
心ナキコトヲ感ス。年ヲ歷テ井上皇后モ他ノ
親王モ皆卒ス。井上ノ怨靈龍トナリタリト云傳タリ。

六年十月吉備大臣並死ス。歲八十二十一月陸奥

國ノ夷起リケレハ鎮守將軍大伴駿河麻呂其根
城ニテ攻破リ是ヲ平ゲテ功アルニヨリテ勅使ヲ遣
シテ褒美セラレ

八年正月内臣藤原良繼ヲ内大臣トス其位右大
臣ノ次ニアリ此年佐伯今毛人ヲ遣唐大使トス小
野石根ヲ副使トス今毛人路次ヨリ疾ト稱ジテ行
カス石根假ニ大師トナリニ發船ス孝謙ノ時藤原
ノ清河大使トナリテ入唐シ彼地ニ留テ歸ラザルニ
ヨリテ度々迎船ヲ遣ハサルトイヘドモ唐帝コレヲ愛
メカヘサス此度モ勅書ヲ清河ニ賜リ飯ルヘキノ旨
仰セ遣サルサレドモ終ニ歸朝セス清河公房前ノ子
ナリ阿倍仲麻呂公元正ノ時吉備大臣ト同ク入唐

ニ彼地ニテ秘書監ト云フ官ニ升リ名ヲ晁衡ト改メ又朝
衡トモ云晁卿トモ云李白魏萬王維包佶ナトイヘル名
高キ輩ト交シムスフ其後歸朝シケルトキ明州ノ津
ニテ日本ノ方ヲ望ミ天ノ原フリサケミレハ春日十九ニ登
ノ山ニ出シ月カモト詠ジケルトナン海上ニテ風ニ逢フテ
水ニ没ストイヒツタヘタリ又或説ニ仲麻呂モ清河モ
同ク歸朝セシカ風ニ逢テ安南國ヘ吹ツケラレ其ヨリ
又清河同道シ大唐ヘ到リ七十餘ニテ病死ストイヘリ
清河モ大唐ニテ病死セリ 九月内大臣藤原良繼
薨ス此人ハ宇合ノ子ナリ押勝カ乱ニ軍功アリ
九年正月侍從五位以上ノ者ヲ召テ宴ヲ設ケ被物ヲ
賜ル 三月大納言藤原魚名ヲ内臣トス 十月遣

唐使第二船第四船歸朝ス。小野石根上。唐使趙寶英等力乗タル第一ノ船ハ風波ニ逢テ海ニ没ス。惣テ遣唐使ノ發スル時ハ大使船副使船判官船主典船トテ。大船四艘ツ、遣サレ

十年正月藤原魚名ヲ内大臣トス

五月大唐ノ使孫興進秦尙期等來テ進物ヲ獻ス。内裏ニテ饗應ヲ設ラル。中納言石上宅嗣其挨拶ヲナス。宅嗣公又オスクレタル人ナリ。其後右大臣大中臣清麻呂館へ唐ノ使者ヲ招キ。饗食ヲ設ク。綿三千屯ヲタメハリテ。歸朝セシム。七月參議中衛大將藤原百川卒ス。歲四十八。天皇モ太子モ甚惜タメ。此モ宇合ノ子ナリ。十一年正月唐使高鶴林并ニ新羅ノ使金蘭藤等來

ル。宴ヲ設ケ祿ヲ賜ル。三月陸奥國夷伊治此麻呂乱ヲ作シテ。按察使參議紀廣純ヲ殺シテ。國中ノ官物ヲ掠ム。大伴益立紀古佐美等ノ官兵ヲ奥州へ遣サレ。又出羽へモ官兵ヲ遣シテ守ラシム。諸國ヨリ兵糧ヲ多ク陸奥へ運シム。九月藤原小黒麻呂ヲ奥州討手ノ大將トス。夷賊ヤウヤクハヒコリテ。タヤスク亡ヒス。

天應元年二月米十萬斛ヲ陸奥國へ贈遣ス。三月天皇不例。四月位ヲ皇太子山部親王ニ讓テ即位セシム。桓武天皇是ナリ。使ヲ伊勢大神宮へ遣シ即位ヲ告グル。六月右大臣大中臣清麻呂致仕ス。内大臣藤原魚名ヲ左大臣トス。八月藤原小黒麻呂與州ノ賊平ケ歸京。正三位ヲ授ラル。紀古佐美等モ軍功ヨリ

賞ヲ蒙ル。大伴益立功ナキニヨリテ。位ヲ奪ハル。十二月光仁天皇崩ス。歳七十三。年号寶龜十一年。天應二年。在位合十二年。

五十代

桓武天皇

光仁第一ノ子ナリ。山部親王ト号ス。母ハ高野夫人ト云。高野乙繼カ娘ナリ。天皇始稱徳ニ任テ。從五位下。大學頭ニ任ス。光仁即位ノ後。四位ノ侍從トナリ。中務卿ニ任ス。寶龜四年。太子トナル。

天應元年。二即位。御弟早良親王ヲ太子トス。延暦元年。閏正月。因幡守水上川繼謀叛シ。内裏ニ夜討セシトハカル事。伊豆國へ配流セラレ。川繼ハ天

武ノ曾孫塩焼王カ子ナリ。母不破内親王ハ淡路國へ流サレ。光仁崩シテ。諒闇ノ内ナルニヨリテ。死罪ヲ宥テ。流罪ス。月卿雲客ノ内。其同類親類タル者皆流罪セラレ。五月。宇佐八幡宮神託アリテ。大菩薩ト稱スト云。六月。左大臣藤原魚名罪アリテ。官ヲヤメラレ。筑紫へ下向ス。其後赦免アリテ。歸京シテ薨ス。藤原田麻呂右大臣トナル。此比ハ左大臣ニテモ。右大臣ニテモ。一人アリテ。左右並置セス。大納言タル人。大臣ニ副テ。政ニ預ル。

二年三月。右大臣藤原田麻呂薨ス。歳六十一。字合ノ。七月。藤原是公右大臣トナル。十月。交野ニ行幸シテ。鷹狩アリ。

三年五月山城國乙訓郡長岡ノ地ヲ見立 六月ヨリ
内裏ヲ作り 十一月天皇奈良ヨリ長岡へ行幸ア
リ。加茂明神へ奉幣シ都遷ノコトヲ由サル此神ハ山
城ノ地主タルニヨリテナリ

四年八月天皇奈良へ行幸。早良太子。右大臣藤原是
公。中納言藤原種継。長岡ノ留守タリ。天皇常ニ遊獵
ヲ好テ。政ヲ太子ニ任セラル種継ハ天皇ノ近臣ニシテ。
内外ノコトヲ執行ス。長岡へ都遷ノコトモ種継ガ進
メ申ストコロナリ。或時太子奏シテ。佐伯今毛人ヲ參
議トス種継。佐伯氏ハ參議ニ昇ル家ニアラスト申テ。コ
レヲサヘトメントス。太子甚憤リ怨テ。事ニフレテ種
継ヲ殺サント奏ス。天皇從ス。コレヨリ政ヲ太子ニ任セ

ス。太子甚恨ム。此時天皇ノ奈良へ行幸スルヲヨキ折
節ト思ヒ。大伴繼人。大伴竹良ヲ。日暮カタニ種継ガ家
へ遣レ子ヲハシム。此時都遷ノミギリニシテ。家造リモ
ニハラニシテ。種継燭ノ下ニアリケルヲ窺テ。矢ヲ放シ。
アヤミタス種継カ身ヲ射通シテ。即チ死ス。天皇大ニ
驚キ。急奈良ヨリ長岡へ歸テ。繼人竹良ヲ捕テ穿
鑿シ。太子ノ取爲ニキレテカリケレバ。逆鱗アリテ。太子ヲ
淡路へ流ス。太子斷食シ。路次ニテ死ス。淡路ニテ葬禮
ヲ行フ。繼人竹良等亦罪シ。其外太子ノ方ニ侍ル者。
流罪セラル種継ニハ正一位左大臣ヲ贈ラル甚悼痛
ニタマフユヘナリ。其後早良ノ靈タマリヲナス由ニテ。崇
道天皇ト謚ス。勅使ヲ天智天皇ノ陵ト。光仁天皇

ノ陵トヘ遣シ太子ヲ廢ルコトヲ申サル。十一月御
子安殿親王ヲ太子トス
五年正月。從三位右衛門督坂上田麻呂卒ス。歲五
十九。此人弓馬ニ達シテ。内裏ノ守護タリ。田村麻呂カ
父ナリ

六年十月。交野ニ行幸。大納言藤原繼繩カ別業ヲ
御座所トス。繼繩ヲ勅使トシテ。天神ヲ交野ニ祠ラ
シム。光仁天皇ヲ奉祭ラル

七年正月。太子元服。大納言繼繩中納言紀船守御
冠ヲ加ヘ奉ル。二月。故藤原百川カ子緒嗣十五歲ニ
テ。御前ニライテ元服。百川カ舊功ヲ仰セ出サシ。御落涙
アリテ。様々ノ賜モノアリ。位ヲ授ケ。封戸ヲ賜フ

七月。前右大臣大中臣清麻呂薨ス。歳八十八。十二
月。奥州ニ夷賊起リケレバ。參議紀古佐美ヲ征夷大將
軍トシテ。奥州ヘ遣サル。坂東ノコトハ汝ニ任スト仰セラ
ル。此年僧最澄始テ比叡山延暦寺ヲ開テ。根本中堂
ヲ建。最澄ハ傳教大師ナリ

八年。奥州夷賊ハビコリテ強クナル。六月。大將軍紀古
佐美。諸軍ヲ率テユレテ討。副將池田真牧。安倍墨繩等
先戰テ敗軍ス。夷賊勝ニノル。官軍大ニ破テ。或ハ殺サレ
或ハ川ニ溺レテ死スル者。三千人。討。美ハワヅカ八十九人
討レタリ。九月。古佐美等歸京ス。大納言繼繩等勅ヲ
承テ。太政官ニライテ。其罪ヲ糾明シ奏聞シケレバ。古佐
美ハ赦免セラレ。真牧墨繩官ヲ奪ハル。右大臣藤原

是公薨ス。歲六十二。武智麻呂。薨。

九年二月藤原繼繩右大臣ト十九。二月東海東山諸國ニ詔シテ兵糧十四万斛ヲ調ヘ。大宰府ニ仰テ鉄骨二千九枚ヲ造シム。奥州ノ夷ヲ征セシタメナリ。八月筑紫飢饉ス。其民八万八千余人ニ物ヲ賜テ賑シメクム。十年正月百濟俊哲。坂上田村麻呂等ヲ東海東山ニ遣シテ軍立ヲエラシメ。武具ヲ調ヘシム。七月大伴弟麻呂ヲ征東大使トシ。俊哲田村ヲ副使トシテ奥州ヘ遣ハサル。

十二年正月大納言藤原小黒麻呂左大辨紀古佐美并ニ僧賢憬等ヲ遣シテ山城國葛野郡宇太村ノ地ヲ見セシム。此地ニ都ヲ遷スヘシトテ。内裏ヲ造ル。遷都ノコトヲ賀茂明神ヘ言テ。天智天皇山科ノ陵。光仁天皇田原ノ陵ヘモ申サレ。六月新都ニ殷富門。美福門。安喜門。偉鑿門。藻壁門。神賢門。陽明門。達智門。談天門。都芳門等ヲ。諸國ヘ分テ。課テ。是ヲ造ラシム。九月菅野真道。藤原葛野麻呂。新都ヘ遣シテ。百官ノ宅地ヲ分テシム。

十三年十月葛野新都ノ内裏成就スルニヨリテ。天皇行幸アリ。此所左蒼龍。右白虎。前朱雀。後玄武。四神相應ノ地ニテ。其上山川麗シク。四方出入ノ道尤便ヨケレ。公百王不易ノ都タルヘシトテ。平安城ト号ス。又其長八尺計ナル土偶人ヲ作リ。鉄ノ甲冑ヲキセ。鉄ノ弓矢ヲ持シメ。帝都ヲモラシメ。君後世ニ都ヲカヘントスルコ

トアラフハ。守護神タルヘシ。誓テ。東山ノ上ニ立テ西
ムキニ是ヲ埋ム。今ノ將軍塚是ナリ。サレハ國家ニ變
アルトキハ。此塚鳴動スト云ヒツタヘメリ

十五年正月。片川野ニ遊獵。天皇常ニ獵ヲ好テ。京外
畿内取々年々行幸。七月。右大臣藤原繼繩薨ス。歲

七十七。豐成ガ子ナリ。此大臣文武ノオアリ。續日本紀ハ
菅野真道ト此大臣ト。二人ノ撰スルトコロナリ。中納言

紀古佐美ト。神王トシテ。政ヲ行ハシム。此冬
東寺ヲ建ラル。此年藤原伊勢人ト云者。鞍馬寺ヲ創

ム。又勤操ト云ル僧。始テ法華八講ヲ執行ワ
十六年四月。紀古佐美卒ス。十一月。從四位下。坂上

田村麻呂ヲ征夷大將軍トス。久ク奥州ニアリテ。軍勢
アルユヘナリ

十七年七月。坂上田村麻呂。清水寺ヲ造ル。八月大
納言神王右大臣トナル

十八年二月。從三位民部卿和氣清麻呂卒ス。歲六十
七

十九年三月十四日ヨリ。四月十八日ニ富士頂自ラ
燃テ。晝ハ煙暗ク。夜ハ火光天ヲ照ス。其聲ハ雷ノゴト

ク。灰ノ下ルコト雨ノゴトシ。山下河水皆紅ナリ。十一
月田村麻呂ニ命ジテ。諸國ニ分散スル奥州夷賊ヲ

黥檢セシム
二十年二月。監試對策アリ。菅原清公題ヲ出シテ是

ヲ問テ。文章生ノオヲ試シ。清公ハ菅原相ノ祖父也

陸奥國ノ夷賊高九ト云者達谷窟ヨリ起リ駿河國
清見關ニテ攻上ル征夷大將軍坂上田村麻呂節刀ヲ
賜リ進發ス高九退テ奥州ヘ引籠田村續テ奥州ヘ
攻入合戦シ神樂岡ト云所ニテ高九ヲ射殺ス又惡路
王ト云賊ヲモ平ク奥州悉クシツニル田村瞻澤郡ニ八
幡宮ヲ建其弓矢等ヲ納メ又達谷窟ノ前ニ山城ヲ
鞍馬寺ヲ似セシモ多門天ノ像ヲ安置ス十一月田
村歸京シケレハ天皇ノ仰ニ云ク近年數度奥州乱ケル
ニ田村今度悉ク退治ス其功大ナリトテ從三位ヲ
授ラレ

二十一年春又田村ヲ奥州ヘ遣シ瞻澤城ヲ造ラシム
七月ニ田村歸京ス夷ノ張本大墓ハ公盛具公ト云者
降参シケルヲ召連テ來ル此二人ヲ免シ其徒黨ヲ
シツメヨト言令歸國セシムベキカレ田村申サレケ
レトモ畜類同前ノ夷ナレ恩シレルハカラストテ二
人トモニ斬罪セラル天皇神泉苑ニ幸シ右大臣神
王ト議シテ藤原緒繼ヲ参議ニ任セラル歲廿九天皇太子
群臣ニカタラク名彼歲ワカクシテ公卿ニ列ス人アヤレ
ムヘシレカレドモ彼父百川ガ功ニアラス。我即位シ
カタレ故ニ其恩ヲ報テ如此ト宣フ
二十三年遣唐使ヲ發ス藤原葛野麻呂大史タリ石
川道益副使タリ菅原清公判官タリ朝野鹿取録事
タリ四人共ニ才學アリ此時傳教モ暇ヲ給テ清公ト
同船入唐ス僧空海モ求法ノ爲ニ私ニ葛野カ船ニ乘

テ入唐ス。空海ハ弘法大師ノコトナリ。葛野之或ハ賀能
モ云ル。去年發船ストイヘドモ葛野ガ船難波津ニテ
風ニ逢テ損スルユヘニ二年延引

二十四年春。天皇不例ニヨリテ諸醫藥ヲ獻スレトモ
驗ナシ。諸社ヘモ祈念セララル。又早良太子ノ爲ニ事ヲ淡
路ニ建。諸國ニ庫ヲ立。年貢ヲ納テ。其國忌及奉幣ノ
科トス。彼怨靈ヲナクサメラル。六月遣唐使等。既朝

七月。葛野參内。從四位ヨリ從二位ニ叙セララル。菅清公モ
六位ヨリ五位ニ進ム。副使道益ハ明州ニテ卒ル。贈位
ル。傳教モ既朝ス。天台ノ法ヲ相傳シ。各ヲ異朝ニ殘セル
弘法ハ逗留シテイニ夕飯ラス。八月傳教ヲ内裏ヘ
召。佛像及經論ヲ奉ル。九月傳教ニ勅シテ。高雄ニテ。

始テ灌頂ヲ行ハシム

二十五年三月。天皇崩ス。歲七十年号延曆。在位二十
五年

五十一代

平城天皇

桓武ノ太子ナリ。御諱安殿ト云。母ハ皇

后藤原乙牟漏ト云。内大臣良繼カ娘ナリ。此帝ハ學問
ヲ好テ。詩ヲモヨク作りタ。桓武崩シテ即位。御弟
神野親王ヲ太子トス

大同元年五月。大納言藤原内麻呂ヲ右大臣トス。諸道
ノ觀察使ヲ始テ置ル。皆參議ノ官ヲシテ兼シム

六月。外祖内大臣良繼ニ正一位太政大臣ヲ贈ル

八月。弘法既朝。真言ノ法ヲ傳ヘ來ル。橘逸勢ト云。學

生モ。此時飯朝。是ハ能書ニテ。名ヲ異國ニ殘セリ

二年正月。遣唐使ノ持來レル物ヲ。筑前ノ香椎宮。并ニ

諸山陵ヘ奉ラル。香椎ハ神功皇后ノ廟ナリ。山陵ハ代

々帝王ノ御墓ナリ。四月。近衛府ヲ左近衛府ト改

メ。中衛府ヲ右近衛府ト改メ。右大臣藤原内麻呂ヲシ

テ。左大將ヲ兼シメ。中納言坂上田村麻呂ヲシテ。右大

將ヲ兼シム。是左右大將相並始ナリ。禁中警衛其外

武官ノコトハ。皆大將ノサハキナリ。大臣ニ相對セル重職

ナリ。八月。神寶并ニ唐國ノ物ヲ。伊勢大神宮ニ奉ル

天皇ノ第二。伊豫親王ト云ルアリ。桓武ノ寵子ナリ。此

年十月。藤原宗成カ勸メニヨリテ。謀叛ノ志アリ。右大

臣内麻呂是ヲ知テ。奏聞シ。宗成ヲ捕ヘ白狀シケレハ。

左中將安倍是雄。左兵衛督巨勢野足ニ官兵ヲ指添

親王及其母藤原夫人吉子ヲ捕テ。川原寺ニ押籠飲食

ヲ断ケレハ。親王モ吉子モ藥ヲ吞テ死ス。宗成流罪セラ

ル。大納言藤原雄友ハ親王ノ外舅ナルニヨリテ。伊豫ハ流

サル。其外解官ノ者多シ

三年五月。出雲廣貞ト云ル官醫大同類聚トイヘル書一

百卷作テ献ル。十一月。大嘗會ヲ行ル。去年行ルヘケレ

トモ。伊豫親王ノコトニヨリテ延引

四年二月。右大臣藤原内麻呂ニ紫ノ朝服ヲ着コトヲ

ユル。天皇即位以後。朝政ヲ自ラ聽タマフコト懈

ラス。四方ヨリ捧ル訴狀ヲ取アツメ。箱ヘ入。次第ニ聞

召テ決断セララル。今春ヨリ木御ニヨリテ。四月位ヲ大

子ニ讓ル 在位四年 年号大同

五十二代

嵯峨天皇 平城同腹ノ第十リ御諱ヲ神野ト云

大同四年四月平城ノ讓リヲウケテ即位ス平城ヲ太
上天皇ト崇メ平城ノ子高岳親王ヲ太子トス

同八月ニ太上天皇ニ朝ス朝覲ノ行幸コレヨリ始ル
十一月右兵衛督藤原仲成ヲシテ太上天皇ノ居所ヲ

奈良ニ造ラシム太上天皇遷リ居タニテ是ヲ平城宮
ト申スナリ仲成公太上天皇ノ近臣ナリ

弘仁元年三月始テ藏入ノ官ヲ置ク巨勢野足藤原
冬嗣藏入頭トナル四月渤海使高南容來ル鴻臚

館ニテ卿食ヲ賜リ彼國王ニ書ヲ賜テ歸ラシム

九月太上天皇ノ命ニヨリテ都ヲ奈良ニ遷サルキナ

沙汰アリコレニヨリテ京中騷動スコレハ藤原仲成カ
妹尚侍藥子ト云者太上天皇ニ寵愛セラレ奈良ニ

アリケルガ仲成其威ヲ假テ權柄ヲ振ントス潜ニ藥子
ヲ以テ太上天皇へ申シケルハ讓位ノ後萬事御心ニ任

セス後悔餘リアリ再御位ニ復リタニテ御心ナキヤ
ト勸ム太上天皇同心ニシテ藥子悅テ太上天皇重祚シタニ

ハ已レ后トナルヘレ政ハ仲成ニ任スベシト思ヒ太上
ノ仰ト稱シテ都遷レノコトヲ云出シテ世ヲ騷シム

天皇聞テ驚テ先伊勢近江美濃ノ關ヲ守シテ仲成
ヲ擯テ藥子カ罪ヲカスヘ平安城ハ萬代不易ノ都

ナリト桓武定メラル所ニ今藥子太上天皇ノ旨ヲイッ

リ。遷都ニコト寄セテ。世ヲ乱ラントス。急キ奈良ノ宮
中ヲ出ヘシトテ。仲成藥子が官位ヲ奪ヒ中納言坂上
田村麻呂ヲ召テ。大納言ニ進メ。禁中ヲ護ラシム。太上
是ヲ聽テ大ニ怒テ。畿内紀州ノ兵ヲ召聚。川口ヨリ
關東ヘ赴ントテ。藥子ト同シ輿ニ乘テ。奈良ヲ出ラル。
天皇此由ヲ聞テ。田村麻呂ヲ大將トシテ。是ヲシツメシ
ム。田村カ望請ニヨリテ。參議文室綿麻呂ヲ相副ラ
ル。即チ宇治山崎淀ノ道ヲ遮ル。仲成ヲハ佐渡ヘ流罪ト
沙汰アリシカ。其儀ニ及ハス。斬罪セララル。太上路次一所々ニ
官兵サヘキル由ヲ聞テ。センカタナク。又奈良ノ宮ヘ還テ。
髮ヲ剃テ入道ス。藥子ハ罪ノ重キヲサトリテ。藥ヲ吞テ
自害ス。其同類皆遠流セララル。太子高皇產靈王モ。位ヲスベ
リテ僧トナリテ。弘法ノ弟子トナリ。名ヲ真如ト改メ天
皇御弟大伴親王ヲ立テ太子トス。御娘有智子内親王
ヲ賀茂ノ齋院トシ。伊勢齋宮ニ准ス。是齋院ノ始メナリ。
此内親王ハ才藝スクレテ。ヨク詩ヲ作レリ

二年正月渤海使者來ル。五月大納言右大將田村
麻呂逝去。天皇甚クレミタニヒテ。絹布米等ヲ多ク賜
テ。宇治ノ郡栗栖村ニ葬ラシム。勅詔ニヨリテ。甲冑劍鉞
弓矢ヲ棺ノ内ヘ入テ。王城ノ方ヘ東向ニ立テ土葬ス。此人
器量骨柄タナラス。身ノ長五尺八寸。胸板ノ厚サ一尺
二寸。眼ハ鷹ノコトク。鬚ハ金緑ノゴトシ。怒ルトキハ鳥
獸モ恐レカクル。戲笑トキハ兒女モナツキシタフ。死スル
トキ五十四歳。十一月奥州夷賊起ル。文室綿麻呂

ヲ遣シテ是ヲ平ク。軍功ニヨリ從三位ヲ授ラル
三年二月。神泉苑ニ行幸アリテ花ヲ御覽シ。詩ヲ作ラ
レム。花宴是ヨリ始ル。天皇學問ヲ好ミ。能詩ヲ作ル。又
筆道スグレテ妙ナリ。又遊獵ヲ好テ。大原栗前水生
交野。芥川大堰川。方々へ度々行幸アリ。六月。紀廣
濱阿部真勝等ヲシテ。始テ日本紀ヲ讀シム。十月。右
大臣藤原内麻呂薨ス。歲五十七。太政大臣ヲ贈ラル
十二月。其子參議冬嗣ヲ召テ。左大將ヲ授テ。大納言
藤原園人右大臣ニ任ス。
四年四月。太子ノ宮ノ南池へ行幸。文人詩ヲ賦シ。右大
臣歌ヲ獻ス。五月。文室綿麻呂。征夷將軍ニ任ス。此年
ノ冬。奥州夷賊起ル。小野石雄。牛羊ノ革ヲ以テ。鎧ニ作

テ是ヲ討平ク

同年。藤原冬嗣。弘法ト相談シテ。興福寺ニ南圓堂ヲ作ル
五年四月。冬嗣閑院ノ館ニ行幸。御製ノ詩ヲ賜ル
五月。皇子信ト弘ト常ト明ト四人。并皇女四人ニ源
姓ヲ賜ル。皇女源ノ姓ヲ賜ルコト。是ヨリ始ル。六月。中
務卿。方多親王右大臣園人等ニ詔シテ。姓氏録ヲ撰ハ
レム。近江國ノ稱。四百束ヲ傳教ニ賜ル
六年正月。渤海國使者王孝廉來朝ス。内裏ニテ宴ヲ
賜ル。孝廉詩ヲ獻シ。祝シ奉ル。孝廉ニ從三位ヲ授テ。歸
國。四月。近江滋賀へ行幸。七月。橘夫人宮智子ヲ
后ニ立テ。檀林皇后是ナリ
七年二月。嵯峨別館へ行幸。文人ヲ召テ。詩ヲ作ラシム

六月弘法紀州高野山ヲ開テ入定ノ地トス

九年四月内裏殿閣御門ノ額ヲ書改ム北面ノ額ハ宸筆十月東面ハ楠逸勢コレヲ書南面并ニ談天門弘法

コレヲ書 十二月右大臣藤原園人薨ス歳六十三

左大臣正一位ヲ贈ラル此比ハ大臣ノ任タヤスカラス

思召ユヘ太政大臣モ左大臣モ闕テ唯右大臣一人ヲ

置レケルガ此後レバラク右大臣モカケテ大納言藤原

冬嗣朝政ヲ奉行ス

十年二月群臣ノ奏ニヨリテ勅使ヲ遣シ畿内ノ富貴者

タクハヘヲケル物ヲ以テ食者二分テ是ヲ救フ此夏旱

甚レカリケレハ伊勢大神官并ニ丹生明神ニ雨ヲ祈

ル秋大ニ雨降テ止ズコレニヨリテ晴ヲ祈ル

十一年正月詔アリテ藤原氏代々ノ勳功ヲ慶美ハ

周公且蕭何ニ比レテ封戸ヲ加ヘ賜ル 二月遠江駿河ニ

住スル新羅人七百許謀叛レテ兩國ノ人民ヲ殺シ伊豆

ノ國ノ米ヲ盜テ船ニ乗テ海ヘ入ントス武藏相模ノ軍兵

起テ追懸悉クニ新羅人ヲ殺ス 四月大納言冬嗣

勅ヲ奉テ弘仁格弘仁式ヲ撰ス格ハ政務ノ先例ヲ考ヘ

損益レテ時ニ宜ヤツニ下知スル條數十リ式八年中定レ

儀式ナリ淡海公ノ撰スル律令格式ヲ加ヘテ明法ノ者

學習ス律令格式ヲ以テ政ヲ行ヒソレニ背ク者ヲ律

テ罪ニ行フ本朝古ヘノ政法此四部ニ備レリ

十二年正月大納言藤原冬嗣右大臣ニ任ス 六月勅

使叡山ニ登リ傳教ヲレテ戒壇ヲ建シム 同年冬嗣

勸學院ヲ立テ藤原氏ノ年ワカキ者ヲ此一所ニ置テ
學問セシム

十三年六月傳教寂ス。歲五十六。天皇挽詩ヲ賜フ

十四年正月東寺ヲ弘法ニ賜リ。西寺ヲ守敏ニ賜ル

二月賀茂齋院有智子内親王ノ山莊ヘ行幸。花宴ヲ

設ケ詩ヲ賦セラル。内親王モ詩ヲ作シ時ニ歲十七

三月越前ノ國ヲ分テ加賀ノ國トス。四月天皇位ヲ

太子大伴ニ讓テ冷然院ニ遷リ居タニテ 在位十

四年。年号弘仁

五十三代

淳和天皇

桓武ノ子。嵯峨ノ弟ナリ。御諱大伴ト云

母ハ藤原旅子ト云。百川ガ娘ナリ。此帝學問ヲ好シ詩ヲ

作り又筆道ニモスクレタニフ。嵯峨ノ時ニ太子トナル

弘仁十四年四月讓リヲウケテ即位。嵯峨ノ子正良

親王ヲ太子トス。嵯峨ヲ太上天皇トス。平城ヲ平前太

上天皇ト云。五月中納言良岑安世右大將ヲ兼シ

ハ是ハ天皇ノ弟ナリ。良岑姓ヲ賜テ仕ヘ奉ル。オ藝

スグレタル人ナリ。外祖藤原百川ニ。太政大臣正一

位ヲ贈ラル。九月太上天皇 嵯峨 嵯峨ヘ遷リタニテ

行幸ノ儀式ヲ用ヒラルベシト。當今ヨリ仰セララルトイ

ヘトモ。辞退アリテ。車ヲ用ヒス。御馬ニ乗タニフ

十一月大嘗會ヲ行ハル。十二月前太上天皇 平城

京ニ入テ遊獵。天皇ヨリ種々ノ物ヲ進ゼラル。其供

奉ノ輩ニモ賜モノアリ

天長元年夏旱ス。弘法神泉苑ニテ兩ヲ祈ル

七月前太上天皇平城崩ス年五十一 十月傳教ノ

弟子義真ヲ延曆寺座主トス天台座主ノ始ナリ

二年四月右大臣冬嗣ヲ左大臣ニ轉シ大納言藤

原緒嗣ヲ右大臣トス左右大臣相並テ政ヲ行フ緒

嗣公百川ガ子ニテ天皇ノ外舅ナリ 八月大學博士

學生等ヲ紫宸殿ヘ召テ論議セシム此以後恒例トナ

レリ 十一月太上天皇嵯峨四十ノ賀ヲ行ハル是年

浦嶋子蓬萊山ヨリ丹後國ノ故郷ヘ歸ルト云ノ夕夕

川昔雄畧天皇二十二年ニ蓬萊ニ遊シヨリ以來三

百餘年ヲ歷テ歸レリ誠ニアマシクウタカハシキ也

三年三月桓武天皇ノ御タメニ太上天皇宸筆ノ法

華經ヲ西寺ヘ寄ラレ説法アリ 七月左大臣正二位

冬嗣薨ス歲五十二正一位ヲ贈ラル閑院左大臣ト号

ス 十一月弘法奏聞シテ東寺ノ塔ヲ立

四年五月滋野貞主ニ勅シテ近代ノ詩文ヲアツメシム

經國集ト号ス二十卷アリ貞主公博學ノ人ナリ此比ハ

君臣トモニ詩文ヲ好テオビアル人多シ

五年二月良岑安世大納言ニ任セララル又此同時藤原

三守三守清原夏野共ニ大納言ニ任セラレ政ニアツカル

九月小野篁大内記トナル是モ才智智拔群ノ人ナリ

六年五月良岑安世奉テ諸國ノ民ヲシテ水車ヲ作シ

ス耕作ノ資トス

七年七月良岑安世逝去歲四十六 十二月大納言

清原夏野カ雙田ノ山庄ニ行幸

八年。滋野貞主ニ勅シテ。古今ノ文書ヲ撰シム。秘府畧ト号ス。一千卷アリ。レトナシ

九年四月。紫野ニ行幸。コレヨリナキ。此所ニ二院ヲ建テ。レ。屢御遊アリ。此度初テ雲林院トナシケラル。十一月。藤原緒嗣ヲ左大臣ニ轉シ。清原夏野ヲ右大臣ニ任ゼ。是十年正月。清原夏野等勅ヲ奉テ。令義解ヲ撰テ奉。是ハ淡海公ノ撰レシ令ノ注ナリ。二月。天皇位ヲ太子正良親王ニ讓テ。西院ニ遷リ居セ。是ヲ淳和院ト云。在位十年。年号天長

五十四代

仁明天皇

嵯峨ノ子ナリ。御講ハ正良。御母ヲ檀林皇

后橘嘉智子ト云。左大臣諸凡カ末清友カ娘ナリ。此帝淳和ノ時ニ太子ニ立

天長十年二月。讓リヲウケテ。三月ニ即位。淳和ノ子恒貞ヲ太子トス。此特嵯峨ヲ前太上天皇ト申シ。淳和ヲ後太上天皇ト申ス。緒嗣夏野左右ノ大臣ニテ。政ヲ執ル。天皇ノ外舅參議橘氏公ヲ右大將ヲ兼シ。武官ヲ掌シム。天皇屢兩太上天皇ヘ朝覲シタマフ。同年十一月。大嘗會ヲ行ル。悠紀主基ノ旗ノカサリニ。梧桐鳳凰。日月。慶雲。西王母カ桃。連理。具竹。麒麟等ノカサリアリ。同年。初テ檢非違使ヲ置テ。參議文室秋津ヲ以テ別當トス。此職ハ非常ヲ戒メ。法ニソムクモノヲ穿鑿スル。役ナリ。サレドモ次第ニ此職重クナリテ。左京右京ノ大夫ノ

掌ル。京中ノ宅地ノコトモ彈正ノ掌ル。糾彈ノコトモ刑部省ノ掌ル。訴訟判断。左右衛門ノ惡黨ヲ追捕スル役モ檢非違使。皆是ヲ合セテ掌ル。又此職ノ下ニ看督長ト云役。六十六人ヲ置テ。又諸國へ一人ヅク分テ遣ス。

承和元年正月元日。天皇大極殿ニテ朝拜ヲ受タリ。二日。淳和太上天皇へ朝覲セララル。三日。嵯峨へ淳和御幸アリ。夕カヒ二年始テ賀シタリ。七日。豐樂殿ニテ始テ白馬節會ヲ行ル。參議藤原常嗣ヲ遣唐大使ニ定メ。小野篁ヲ副使ニ定ラレ。其外判官録事ノ属官モ定メラル。二月。射場へ行幸アリ。賭物ヲ設テ射藝ノ優劣ヲ試ム。天皇自ラ射タリ。次ニ大臣以下皆射ル。三月。嵯峨太上天皇右大臣夏野カ双岡ノ山庄へ御幸アリ。

八月。入子内親王賀茂川ニ移シ。始テ野宮へ入ル。伊勢ノ齋宮ニ備フヘキニヨリテナリ。

二年正月。芹川へ行幸。天皇モ遊獵ヲ好ミテ。屢洛外へ出御アリ。三月二十一日。弘法高野山ニシテ寂ス。五月。神泉苑ニ行幸アリ。池魚ヲ捕シメテ。嵯峨淳和兩太上天皇へ進セラル。七月。菅原清公ヲ召テ御前ニテ後漢書ヲ讀シム。九月九日。紫宸殿ニテ菊ノ宴アリ。文人詩ヲ献ス。

三年二月。遣唐使藤原常嗣。小野篁等ヲ召テ。右大將橘氏公勅ヲ奉テ。緋布等若干ヲ下サル。四月。紫宸殿へ常嗣篁ヲ召テ。餞シテ酒ヲ夕ニハリ。文人等ニ詩作ラシメ。御衣沙金緋等ヲ賜ル。此次テ藤原清

河阿倍仲麻呂石川道益等入唐シテ歸朝セスレテ死
タル輩ニ立テ贈ラル 七月遣唐船四艘太宰府ヲ出
ケルガ風ニ逢テ飯洛

四年三月遣唐使發船此比僧圓仁モ入唐ス慈覺大
師是ナリ 九月清原夏野薨ス歳五十六

五年正月藤原三守右大臣トナル 六月清涼殿ニテ

直道廣公群書治要ヲ讀 八月丁亥釋奠尚書ヲ

講ス凡春秋ノ釋奠ニハ五經并ニ論語孝經等ヲ講セ

ラル 十二月遣唐副使小野篁病ト稱シテ路次ヨリ

歸ル是ハ常嗣オアリトイヘトモ篁ニ及ハズシカルニ常

嗣ヲ大使トシ篁ヲ副使トセラル篁満足セストイヘトモ

勅ナレハ既ニ出京ス四艘ノ船ノ内常嗣ガ乗タル第一ノ

船損ジケレバ篁ガ乗タル第二ノ船ヲトリカヘテ常嗣乘

ケルニヨリテ篁怒リ恨テ行ス又ヲ作テ是ヲ譏ル其

詞ノ内ニ上ヲ憚ラサル心アルニヨリテ嵯峨ノ太上皇

大ニ怒テ其罪ヲ沙汰セラル然レトモ博學大才能書

カタクソナル者ナルニヨリテ死罪ヲ宥メ隱岐國ヘ

流サル年ヲ歷テ赦免セラレテ歸京

六年八月常嗣歸朝ス 九月參内紫宸殿ニテ右大

臣藤原三守ヲ以テ大唐勅書ヲ捧ク懇ノ仰アリ常

嗣公葛野ガ子ナリ父子相繼テ遣唐大使トナルコト

日本ニタダヒナキコトナリ一稱美ス

七年二月盜賊所々ニ興ルニ因テ左京右京五畿七道

ニ勅メ此ヲ捕シム 五月淳和太上天皇崩ス歳五

十二 七月右大臣藤原三守薨ス 八月諒闇ノ内ニ
ルニヨリテ釋奠ヲ停ララル大納言源常ヲ右大臣トス
九年春渤海ノ使者來ル四月ニ暇ヲ給テ國ニ歸ル
七月嵯峨太上天皇崩ス歲五十七此ヲリフシ春宮
帶刀伴健岑但馬守橘逸勢等謀叛ノクハタテアリ
太子恒貞ヲトリタテ申サントノ事ナリ恒貞ハ淳和
ノ子ニテ天皇ノイトコナルニヨリテ淳和崩ノ後互
ニダツル心アリケルニヤ嵯峨崩御ノニギレニ健
岑逸勢カク謀ルルヘレ阿保親王ヒソカニ此ヲ知テ
天皇ノ御母嵯峨ノ皇太后ニ申ス皇太后此ヲ藤
原良房ニ告テ奏聞ス即官兵ヲ遣シ健岑逸勢カ
家ヲ圍テ是ヲ捕ヘ糺明ス又大納言藤原愛發中

納言藤原吉野參議文室秋津ヲモ捕フ此等皆淳和
ノ舊臣ニテ太子ノ方人ナルニヨリテナリ太子ハ此事ヲ
知ストイヘトモ彼等ヲ近ケ親ム罪アリトテ其位ヲ
スベリ愛發吉野秋津公官ヲ奪テ京ヲ追放シ逸勢
ハ伊豆ヘ流サレ健岑ハ隱岐ヘ流サレ太子ハ後ニ僧ト
成テ恒寂ト号ス能書ノ人ナリ其後天皇ノ御子道
康親王ヲ太子トセラレ
十年七月左大臣藤原緒嗣薨ス歲七十 九月對馬
嶋ヨリ奏聞シテ新羅ノ方ヨリ鼓ノ聲ヲヒタシクキ
コエルヨシ申シケレハ若不慮ノ事モアルヘキヤトテ筑
紫ノ人數ヲ對馬ヘ遣シテ守ラレム 十二月文室官田
麻呂ト云者謀叛ノクハタテアリ事アラハレテ官田麻

呂ヲ捕ヘテ伊豆へ流ス其子共モ皆流罪セラレ
十一年正月三日天皇御母皇太后へ朝覲セラレ
六月日本紀ヲ去年六月ヨリ菅野高年ニ命ジ讀始ラレ
此ニ至テ讀アル 七月源常ヲ左大臣トス橘氏公ヲ右
大臣トス常ハ天皇ノ弟ナリ氏公ハ外舅ナリ
十二年正月尾張連濱主ト云者其年百十三ニ御前
ニテ長壽樂ヲ舞其大老ニテ起居ノ自由ナルヲ感シ御衣
ヲ給ル 二月菅原是善文章博士トナル菅丞相ノ父ナ
リ是善ヲ清公ト云清公ノ父ヲ古人ト云古人ヨリ以後代
々博學大才ナリ菅丞相ハ今年生レタリ世ニ菅丞相
父モ十ク母モ十ク五六歳ノ時何方ヨリトモ十ク是善
ノ庭ニ來リレテ養テ子トスト云傳今ヤレキ事ナリ

十四年二月藤原貞敏ヲ雅樂頭トス此人入唐シテ音
樂ヲ習來レリ 五月春澄善繩御前ニテ莊子ヲ讀
リ又漢書ヲ讀ム 十月慈覺唐ヨリ歸ル此僧在唐
十年ノ内ニ大唐武宗皇帝天下ノ僧尼ヲ禁制セラレ
ニヨリテ慈覺モレハラク還俗セラルト云傳タリ又圓
觀ト云ヘル名僧慈覺ト同時ニ入唐シケル分猶唐ニ留テ
版ラズ 同月橘奈良麻呂ニ太政大臣正一位ヲ贈ラ
ル是ハ孝謙ノ時ニ押勝ニ殺サレシ人ナリ天皇御母ノ
先祖ナルニヨリテ如此ノ榮アリ 同月賀茂齋院有
智子内親王薨マ歲四十一嵯峨ノ娘ナリ
十二月右大臣橘氏公薨ス歲六十五
嘉祥元年正月大納言藤原良房右大臣トナル大織冠

ヨリ七代。左大臣冬嗣ノ子ナリ。後ニ忠仁公ト申スハ是
ナリ。六月豊後國ヨリ白亀ヲ奉ル此ハ目出度物ナ
リ。百官祝奉ル此ニヨリテ。年号ヲ嘉祥ト改ラル。惣ノ
亀ハ靈物ナルニヨリテ。元正天皇ノ靈龜ノ年号モ。聖
武ノ神龜モ。光仁ノ寶龜モ。皆龜ヲ奉ルニヨリテ。改元
セラル

二年四月渤海ノ使王文矩等來朝。鴻臚館ニ居ラレム。
良岑ノ宗貞勅使トシテ。往テ勞フ。宗貞ハ安世ノ子ニ
テ。天皇ノ近臣ナリ。五月。文矩等參内。宴ヲ給フ。其
後小野篁等勅使トシテ。勅書ヲ給テ歸國。十月。天
皇四十賀行ハル。皇太后ヨリモ。太子ヨリモ。様々ノ物ヲ獻
ゼラル。十二月。洛中ヲ行幸アリテ。錢米ヲ貧者ニ給ル。

又囚獄司ノ邊ヲ巡給テ。右大臣良房ニ命ジテ。罪今
赦ス

三年正月。天皇皇太后ノミレニ。冷然院へ行幸ナリ。入
階下ニテ。輦ヨリ下リ。殿へ上テ。簾ノ前ニ北面シ。跪テ
禮ヲ盡シ。階下へ下テ。袂車ニ乘テ還御。人皆其孝敬ヲ感
ズ。子トシテ。父母ニツカフル。天子トイヘトモ。常ノ人ニ異ナ
ラサル理ヲ示サル。ナルヘシ。二月。天皇不例。三月。崩
御。歳四十一。深草ノ陵ニ葬ル。葬禮ハ遺詔ニヨリテ。輕ク
セラル。天皇生ツキサトク。學問ヲ好シ。筆道ニモ達セリ。
又琴ヲヒキ。笛ヲフキ。射藝ニモユテ。醫術ヲモ習ヘリ。
然レドモ。天下太平ナルニヨリテ。花麗ヲ好シ。大内裏
モ。此時作ラレケルトナシ。左少將良岑。宗貞コトナシ。近

臣ナルニヨリテ。髮ヲノリテ僧トナリ。名ヲ遍昭ト改ム。後ニ花山ノ僧正ト云ハ是ナリ。天皇在位ノ年号。承和十四年。嘉祥三年。合テ十七年。

五十五代

文德天皇

仁明ノ子ナリ。御諱ヲ道康ト云母ハ皇后順子。左大臣藤原冬嗣ノ娘ナリ。世ニ五条后ト申ス。順子ノ事ナリ。天皇ハ仁明ノ承和九年ニ太子トナル。

嘉祥三年仁明崩ス。四月天皇即位。五月嵯峨ノ天皇太后崩ス。仁明ノ御母ナレハ天皇ノ祖母ナリ。此太后佛法ヲ好シ。檀林寺ヲ作ル。故ニ檀林皇后ト号ス。慧覺ト云僧ヲ唐ヘ遣サレテ。禪法ヲ問フ事アリ。又學問ヲモ好テ。學館院ヲ建テ。橘氏ハ皆ヲシテ。讀書セシメラル。

仁明ノ崩御ヲ哀テ。居トナリ。程ナク崩ス。歳六十五。梅宮ハ橘氏ノ先祖ノ社ナリ。此后ヲモ勸請ストナシ。七月外祖冬嗣ニ太政大臣ヲ贈ラル。十一月。惟仁親王ヲ太子トス。惟仁ノ母深殿ノ后ハ右大臣良房ノ娘ナリ。ニヨリテ。惟仁生レテ。ワツカニ九月ヲ歷テ太子ニ立ラル。世ニ惟仁ノ兄惟喬ト惟仁トアラソヒアリテ。相撲ノ勝負ニヨリテ。位ヲ定ラルト云ハ誤ナリ。其上惟喬ノ方ヨリ相撲ニ出タリト云ヘル。紀名虎ハ四年以前仁明ノ承和十四年ニ病死セリ。然レハイヨク。虚説ナリ。仁壽元年三月良房ノ館ニ行幸。櫻花ヲ見テ。詩歌ノ御遊アリ。四月春澄善繩ヲ召テ。文選ヲ講セシム。十一月大嘗會ヲ行ハル。

二年五月諸國ニ其露フルヨレ奏聞ス 十二日參議
小野篁卒ス歳五十一。其子孫多關東ニアリテ武士ト
ナル足利ノ學校ハ篁ガ舊迹ナリト云傳タリ

三年二月良房ノ館ニ行幸。其家人難波ノ蔓麻呂從
五位下ニ叙セラル 六月一品葛原親臣薨ス。是ハ桓
武ノ子ニテ平家ノ先祖ナリ 八月百濟河成卒。是ハ
勝タル繪ノ上手ナリ 同月僧圓珍入唐ス智證大師
是ナリ 今年天下疱瘡ハヤリテ貴賤死スル者多シ
齊衡元年六月左大臣源常麿ス。歳四十三 七月備
前ノ國ヨリ断食ノ僧來ル神泉苑ニ居ラレム人皆奇特ナ
リトテ。群聚ノ此ヲ見ル。後ニ聞ハ此僧夜深テ後殿升ノ
米ヲ水ニニノ飲ケルカ其厨ニ糞アルニヨリテ。其断食ハ詐

リナルコトヲレル

二年正月奥州夷賊起ルニヨリテ。近國ノ兵千餘人ヲ
國司ノ加勢ニ遣サレ兵糧ヲモ給ル 五月東大寺ノ大佛
ノ頭自ラ地へ落ケレハ九月大納言藤原良相ト僧真如
トニ勅メ聖武ノ例ニカセ天下ヲ勸進セシメテ。是ヲ修理
セシム。良相ハ良房カ弟ナリ

三年七月中納言藤原長良薨ス。歳五十五。良房ノ兄ナ
リ。良房男子ナキニヨリテ長良ノ三男基經ヲ養テ子
トス 十一月春澄善禪ヲ召テ誓書ヲ講セシム 同日
天皇新ニ殿ヲ作りテ庭上ニテ自ラ天ヲ祭ラレ藤原良
相菅原是善等其事ニ預ル

天安元年二月右大臣良房ヲ太政大臣トシ大納言源

信ヲ左大臣トシ。良相ヲ右大臣トス。信ハ天皇ノ叔父ナリ。
大友高市。押勝。道鏡ガ以後。太政大臣則闕ノ官タリ。
今良房拜任。此ヨリ藤原氏ノ人相繼テ昇進ス。三月。
良房ニ劔ヲ帶テ。参内スルヲ許サ。漢蕭何カ例ナリ。
良房レバク。辞退ス。六月。對馬嶋ニ亂アリテ。國司ヲ
殺ス。太宰府ヨリ兵ヲ遣ソ。此ヲ平ク。十一月。弘法
ニ大僧正ヲ贈ラ。其弟子僧正真濟ガ申スニヨリテ
ナリ。十二月。第一ノ王子惟喬御前ニテ。元服。四品
ヲ授ケラル。良房等ヲ召テ。宴ヲ給ハル。天皇此皇子
ヲ愛シ給ヒテ。惟仁幼少ノ内。惟喬ヲ先暫ク太子ニモ立
ニホレク。思召トイヘトモ。良房ノ威ヲ憚テ。カナハス。其上
左大臣信仁ニ。惟仁ヲ太子トセララル。上ハ違變ニ及ブ

ヘカラスト申スニヨリテ其專ヤニヌ

二年二月。京中群盜起ル。坂上當道。藤原有真等ニ仰テ
是ヲ捕ヘシム。六月。白雲良ノ方ヨリ。坤ノ方ヘ且ル時
ノ人此ヲ旗雲ト云。八月。天皇崩ス。歳三十二。帝ハ
政ニ心ヲトメテ。遊獵ヲ好ミス。然レドモ多病ニヨリテ。
萬機ニ怠リレガ。果ノ御崩ナリ。在位ノ年号 仁壽
三年 齊衡三年 天寶三年。合セテ八年。

王代一覽卷之二終

